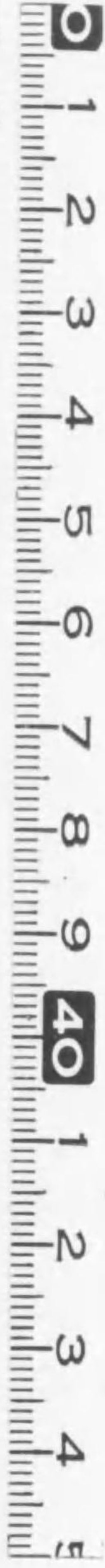


特23-626



1200800151678



始



特23
626

定 新

實 用 教 授 法 要

小 平 高 明
著



京 東

晚 成 處



序

近時、教授法研究の歩武、著しく進み、從て、その面目を一新するものありと雖も、或は自學輔導を以て教授の眞髓となし、或は腦髓組織の生理を辨へ、精神物理の實驗を行ふを以て教授法研究の要諦となすあり。時に、教授は拙なるを貴ぶ、教授法の進歩は兒童學力退歩の要因なりと罵るなど、人をして適從するところを知るに苦しましむるもの甚、多し。抑教授なるもの、もとより活ける兒童に授くる、活ける教師の業なれば、それが間に幾多の變通妙用あるべく、到底、千遍一律の法則に率由する能はざるなり。然りと雖も、先人の經驗は後人の前驅なり。一通りの方法を辨へて事に當ると何の用意もなく

素手にてかかるといづれか成功に近しとするぞ。本書は、この要求に應ぜんとして生れしもの、最近改正の法規の趣旨により、國定教科書を運用せんもの、の指針に供するものにして、これを師範學校或は教員講習會の教科書に用ひて適當なるを信ずるものなり

明治四十一年十月小學校令施行規則一部改正の後に
著者識す

新定實用教授法要

目次

第一編 總論

第一章 教授の目的

第二章 教授の材料

第三章 教授の方法

第一項 教授の階段 第二項 教授の形式

第四章 教具の使用法

第五章 教調

第二編 各論

第一章 修身科

一 三 五

一〇 三

三

- 第一節 修身教授の目的
- 第二節 修身教授と訓練との關係
- 第三節 教授の材料
- 第四節 教授の時間
- 第五節 教授の階段
- 第六節 教授上注意すべき事柄

第二章 國語科

- 第一節 國語教授の目的
- 第二節 教授の材料
- 第三節 教授の時間
- 第四節 教授の方法
- 第一項 讀み方教授
- 第二項 綴り方教授
- 第三項 話し方教授
- 第四項 文法教授

三 六 六 三 二 六 三 四 三 九 四 四 五〇

第五項 書き方教授 附 實地教授案

第三章 算術科

- 第一節 算術教授の目的
- 第二節 教授の材料
- 第一項 材料の選擇
- 第二項 材料の排列
- 第三節 教授の時間
- 第四節 教授の階段
- 第五節 教授上注意すべき事項

第四章 日本歴史科

- 第一節 歴史教授の目的
- 第二節 教授の材料
- 第三節 教授の時間
- 第四節 教授の階段

九三 九三 九五 一〇八 一〇九 一一五 一二七 一二七 一二九 一三三 一三三

第五章 地理科

第五節 教授上注意すべき事項

第一節 地理教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段

第五節 教授上注意すべき事項

第六章 理科

第一節 理科教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段

第五節 教授上注意すべき事項

一三三

一三四

一三四

一三六

一四〇

一四二

一五〇

一五二

一五二

一五四

一五八

一五九

一六九

第七章 圖畫科

第一節 圖畫教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段 附 實地教授案

第五節 教授上注意すべき事項

第八章 唱歌科

第一節 唱歌教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段 附 實地教授案

第五節 教授上注意すべき事項

第九章 體操科

一七二

一七二

一七三

一八〇

一八一

一八七

一九〇

一九〇

一九一

一九三

一九四

二〇〇

二〇四

第十章 裁縫科

第一節 裁縫教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段 附 實地教授案

第五節 教授上注意すべき事項

第十一章 手工科

第一節 手工教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段 附 實地教授案

第五節 教授上注意すべき事項

二〇四

二〇七

二〇九

二一〇

二一一

二二六

二二六

二二七

二三三

二三四

二三〇

二三二

二三二

第十二章 農業科

第一節 農業教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段

第五節 教授上注意すべき事項

第十三章 商業科

第一節 商業教授の目的

第二節 教授の材料

第三節 教授の時間

第四節 教授の階段

第五節 教授上注意すべき事項

二三四

二二九

二四一

二四四

二四五

二四六

二四九

二五〇

二五二

二五三

二五四

二五四

二五六

第十四章 英語科

- 第三節 教授の時間
 - 第四節 教授の階段
 - 第五節 教授すべき事項
- 第一節 英語教授の目的
- 第二節 教授の材料
- 第三節 教授の時間
- 第四節 教授の階段
- 第五節 教授上注意すべき事項

二五九
二六〇
二六一
二六三
二六三
二六四
二六六
二六七
二六九

附録

小學校教則(明治四十年三月二十五日改正及び
明治四十一年九月七日一部改正)

新定 實用教授法要

第一編 總論

第一章 教授の目的

教育の目的は實地生活の準備と品性の陶冶との二方面にあり。かかる目的に到達すべき手段を教育の方法と云ひ、兒童の身體を發達せしめて之を強壯にし且つ疾病の起るを防がん爲に施す方法を養育と稱し、感情意志を陶冶するを訓練と云ひ、知識技能の傳達作用を教授と名づく。もとより學問の研究上よりなせる便宜の區分法にして、實際に於ては養育、訓練、教授の三者の全く孤立して行はるべき場合極めて少く、互に連絡關

係して進行し以て教育の目的を遂ぐるを得べきなり。教授は知識技能の傳達作用なれど何の爲に知識技能を傳達するかと問はば、兒童が將來個人として、はた又社會の一員として生活するが上に有用なる知識を與へて、その知能の材料を豊にすると共に兒童の心意作用を練磨して、應用活達の能を得しめんとするにあり。前者は教授の實質的目的にして後者はその形式的目的なり。教授の實質的目的と形式的とは相俟つて始めて教授の目的を達し得べく、二者偏重あるべからず。

概要 實地生活に有用なる知識技能をなるべく多く授與せんとするは、教授の實質的目的にして、材料は少くとも、よく兒童に咀嚼類化せしめてその能となし、以て應用の力を得しめんとするを形式的目

的とす、二目的調和して輕重なきを要す。

設問 教育、教授、二目的の關係を問ふ。教授の目的を記せ。

第二章 教授の材料

教授の目的を達せんには傳達すべき材料なかるべからず、材料は廣く人事界、自然界より取るべしと雖も、百科の學盡く普通教育の材料となす能はず。兒童は學校を出でて實地の社會生活に入らざるべからざるものなれば、現時の國民開化の立脚點を明にすべきものを選択すべきは論なけれど、これらの材料が兒童心意の發達に應じ、よくその理解し得るもののみに限らざるべからず、小學校令の定むる教科目は修身、國語、算術、體

操、日本歴史、地理、理科、唱歌、圖畫、裁縫等の必修科目と手工、農業、商業、英語の隨意科目とあり。かくして選擇し得たる材料は如何に排列すべきかは、一に兒童心意の發達に遵由すべきなり、心意は近より遠に及び、簡より繁に入るもの、且つその發達は徐々として飛躍なく缺損なきものなれば、あらゆる教科は郷土の材料を基本として漸次に範圍を擴張し、やがては直觀を離れたる虚形抽象の事項に及ぶべきなり。人の知識はよく統一せられてこそ用に應じ便に利するを得るなれば、各教科は各、その固有の價値を發揮すると共に、常に聯絡關係して一團の生氣ある知能たらしめ、よく自己の目的に應じて自由に活用し得るに至らしむべし。これ教材の

統一の必要ある所以なり。

概要 教材は國民現時の開化の立脚點を明にすべきものより、兒童の理解力に適せるものを選択すべし。教材は兒童心意の發達に従うて近より遠に、簡より繁に缺損なく排列すべきなり。郷土の材料を基礎とすべきの理ここにあり。

諸種の教材はよく連絡關係して生氣ある一團の活知識たらしむるを要す。

設問 教材の選擇排列の原理を問ふ。教材の排列に關し郷土の關係を考ふべき所以の理を示せ。

第三章 教授の方法

教材を如何にして兒童に傳達すべきかを論究するが即ち教授の方法なり。これには如何なる順序により教

材を傳ふべきか、如何なる形を以て教材を傳ふべきかの二問題を生ず、前者を教授の階段と云ひ、後者を教授の形式といふ。これらは共に教材の性質と、之を受取るべき兒童の心意活動の理法に最もよく適へるものこそ最良の階段形式となせど、今普通に用ひらるるものを擧げん。

第一項 教授の階段

教材を傳達すべき順序は兒童の學習の心理上の順路によらざるべからず、學習の心理上の順路は先づ、事物の直觀若しくは直觀的の説明によりて、その事物を自己心中に受領し、次にこの新知識と既知の舊知識と辨

異統同して概念或は法則を作り、次にはこの概念法則を各般の場合に應用して、益、その知識を確むるものなり、學習の順序かくの如くなれば、教授も自、直觀、思考、應用の三段を經過せざるべからず、直觀せしめんには、先づ新知識を受領し得る状態に心意を向けざるべからず、之が爲には目的を指示して兒童のつとむべきところのものを知らしめ、新材料と類似する舊觀念を整頓せんために豫備を施す。かくて直觀又は直觀的方法を用ひて新材料を提示し、次に新知識間の關係又は新知識と舊知識との關係を比較して概念法則に抽象せしめ、さて之を實地に應用せしめ或は想像上より活用せしむ、この豫備、提示、比較、總括、應用を五段の形式的階段

といふ、人の知識收得の順序は大方この順序に従ふべきなれど、教材の性質と児童心意の發達如何により必ずしも嚴密に襲用するを要せず。

概要 教授の階段は教材の性質と児童心意の發達階段とにより一様ならざれど大方は目的の指示に次で豫備、提示、比較、總括、應用の五段を経べきものとす。

設問 教授の階段を説明すべし。

第二項 教授の形式

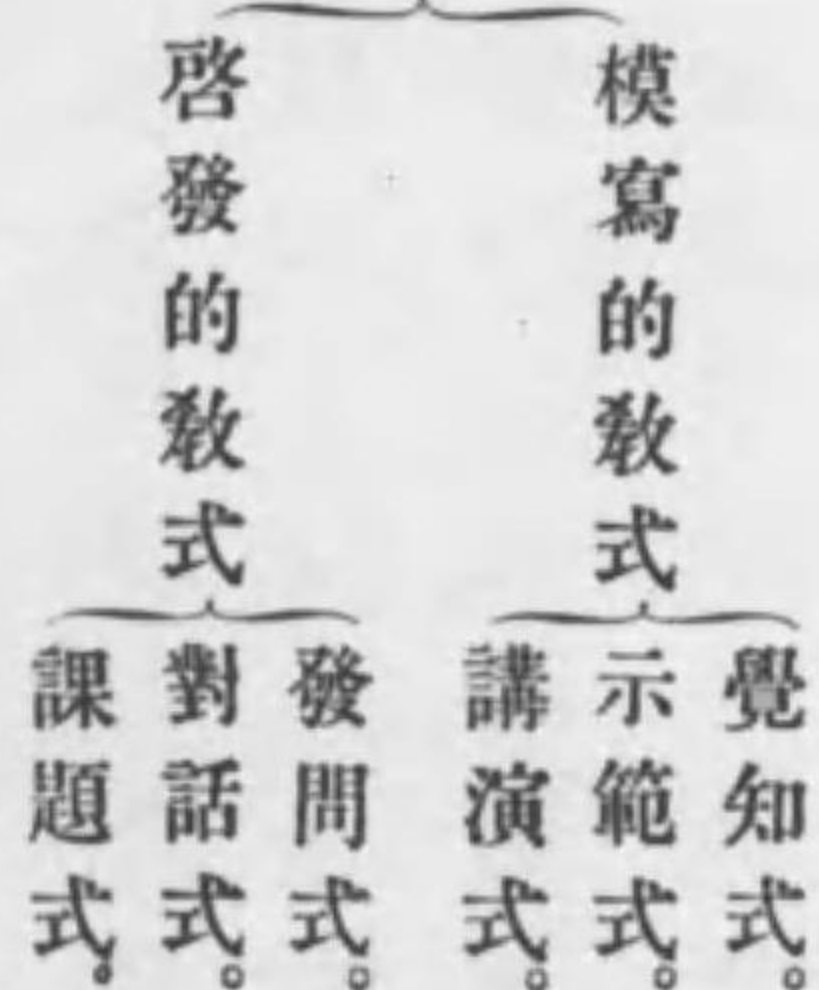
教授の形式とは教師と生徒との教授上の交際に於て行はるる體裁にして、教師主となりてその思ふ所の儘を児童の心中に移さんとする模寫的教式と、児童を主

として教師は寧、受動者の地位に立ち児童をして發明發見せしめんとする啓發的教式との二あり。模寫的教式はその取る所の方法により三種の區別を生ず、教師の繼續せる言語によりて講演するを講演式とし、實物繪畫標本を示して説明するを覺知式、教師の模範により児童をして模倣せしむるを示範式とす。啓發的教式も三種に分つを得べし、教師問を發して児童をして答へしむる發問式と、生徒よりも教師よりも相互に問答する對話式と、教師より問題を提出し児童をして獨立して動作せしめその活用を檢閲する課題式とあり。これらの形式は各長所あるべければ適當の場合に適當の形式を用ふべきなり。發問式は最も多く用ひ

らるべきものにて、發問は明瞭なるべく、兒童の理解力に相當し、よく全級に分配して、總べての兒童の注意を惹くに足るものたるべし。

概要

教授の形式



設問 教授の形式を説明すべし。

第四章 教具の使用法

教授をなすに際し器械、標本、實物、模型、繪畫を始とし教

科書、黑板その他の教授用具の使用法に注意せざれば大に教授の効を減ずるものなり。所詮は兒童の心意活動に最も適當したる方法が最良の方法なりとす。黑板は常に清潔になすべく、當面に必要な事項の外は、拭ひ去て板面に残さざるべし。教科書はその材料の内容、比較的詳密なるときは、提示の段に用ふるも可なるも、大方は一應教科書を離れて説明したる後、比較總括の段に用ふべきなり。器械、掛圖、標本類は兒童の期待の念、勃發せる時機を見はからひ、之を提出すべきなり。

概要

教具の使用は兒童の心意に教材のよく徹底せんに最も好都合なる方法をとるべし、標本、掛圖は期待の念に投じ、黑板は清淨にして不用の文字を止めず、教科書はよく既授の知識を總括せしむるに

用ふべきなり。

設問 教具の使用法につき注意すべき條項を擧げよ。

第五章 教調

教授する際の教師の態度を教調といふ。教師は身體健全にして、元氣内に充ち、常に喜悅の情を以て兒童に對し言語は明瞭にして抑揚あるべく、耳目は敏捷にしてよく些細のことをも辨じ、舉動温雅なるが上に凜然犯すべからざる所あるを要す。猶教材に精通し教授の方法に熟達して、極めて確かなる調子を以て兒童に臨むべきなり。

概要 教師の身體は健全、音聲は明瞭、態度は活潑莊重なるべし。精神

は快活にて教ふるを喜び、教材、教授法に精通して確なる調子あるべし。

設問 教授に要する教師の態度を述べよ。

第二編 各論

第一章 修身科

第一節 修身教授の目的

修身科教授の目的は人道實踐の方法を指導して、以て兒童の道德的品性を涵養するにあり。道德的品性とは何ぞや、古來徳と呼びしものにて即、意志行爲の習慣の道義に適へるものに外ならず。これには道義の何物た

るを知らしめ、善惡正邪を誤なく、判斷辨別する知力を養ふのみならず、善を見て喜び惡を知りてにくむ情操を促し、さてその善と知りしところ、正と感ぜしところのものを如何なる順序方法を執りて實行すべきかを指導して、やがては習慣とならしめ同様の場合には同様の行動をなすべき留存する傾向を作り、遂には努めずして行動云爲一に道に合するに至れば取も直さず道德的品性の完備せられたりと云ふを得べし。かくなさんにはまづ如何にして人道を實踐すべきかの方法を授くるを第一となせば、修身科教授の直接目的は人道實踐の方法指導にあり。その結果として道德的品性の確立を望むは、教育の一目的なり。されば如何なる教

科も、とどのつまりはかかる目的に歸著すべきなれど、各教科にはそれぞれ固有の目的ありて、強いて道德を教ふべきものに非ず、修身科は直接にこれが任に當るものなれば、その他教科の上に位するは勿論、他の教科にて授けしことどもを統一するものと云ふを得べし。

概要 修身科教授は人道實踐の方法を指導するを以て、直接の目的となし、よつて以て道德的品性を陶冶せんとするを終極の目的とす、道德的品性は吾人の意志行爲の習慣の道義に合せるを云ふ。

設問 修身科教授の目的を擧げよ。道德的品性とは何ぞや。如何にせば道德的品性を陶冶し得るぞ。修身科と他教科との關係如何。修身科の目的と教育の目的との關係を述べよ。

第二節 修身教授と訓練との關係

教授と訓練とは學問の上にてこそ分つを得べきなれど、實地の教育事業には截然たる區別あるなし。教授を離れたる訓練なく、訓練なき教授なし、何れの教授に於ても兒童が喜で學び樂しく勉め一心不亂に勵みなば、これ即、その意志を強めて、人物を作る所以なれば訓練ありと云ふを得べし、されど研究の便宜の爲に知識技能の傳達作用を教授と稱し、意志を直接に陶冶して實行に表はさしめ、習慣を作らんとするものを訓練と呼び分つなり。最もよき教授は同時に訓練もよく行はれ、良からぬ教授はたとひ千言萬語の道義を口にするも、少しも訓練上の價值なきなり、何れの教科もそれぞれ

訓練上の價值あれど、修身科は特に密接の關係を有し、他教科にて養ひし意志の向ふ所を定めて、義務の何たるを知らしめ、義務を果す方法を授け機會あらば實地に表はさんとの希望を起さしむるものなり。かかる希望と機會を與へて實行せしめて、習慣となさしむるはやがて訓練なり、されば修身科は總べての教科を統一して訓練の基礎を作るのみならず、訓練をまちて始めて修身科教授の功を完うしたりと云ふを得べきなり。

概要 知識技能の傳達を教授と名づけ、意志の直接陶冶を訓練と稱す、總べての教科は皆訓練上の價值あれど、修身科は他教科にて養ひし意志の方向を定めて、之を實地に表はさんとの希望を促すもの、而してかかる希望を實行すべき機會を與へて行爲となし、習慣となさんとするもの即、訓練なり。修身科の教授は訓練に基礎を供し、訓練は

修身科教授を完結せしむ。

設問 教授と訓練との異同を説明せよ。修身科が他教科を統一する理由如何。修身科教授と訓練との關係を述べよ。

第三節 教授の材料

修身科は義務の何たるを知らしめ、義務を果す方法を知らしめ、以て人道實踐の方法を授くるにあれば、その教授の材料は(一)善惡正邪を批判すべき識見を與ふるもの、(二)之を實行すべき方法を知らしむるもの、(三)實行に際し嫻雅適切ならしむべきものの三あるべし。古今内外の人の實地に行動せし善行の實例或は作話など所謂例話は、主に第一第二の材料を含み、先哲の銘言、詩

歌、俚諺、訓誨、或は道義上の法則の如き、總べて訓辭と稱せらるるものは、第一或は第二の材料にして、行儀作法は第三の材料なり。例話は道義の具體的實例なれば兒童に解し易く、亦感情を暢發するの利あり。訓辭は抽象的のものなれど、巧に道德上の眞理を表はし、服膺に便なれば、共に徳教上効果少しとなさず三種の教材は別々に授くることを得べく、又例話を授けてその中より訓辭を抽出し、猶その事實に因みて行儀作法を授けなば、兒童をして身その境にあるが如き思あらしめ陶冶の効一層大なりとす。修身科の教材は例話訓辭作法の三にあることながら、之を授くるに當り人物の例話を主として、その人一生の經歷を語る間に適宜教訓を加

へんとするを人物標準となし、訓辭を主とし必要なる徳目を序を以て授くるを徳目標準といふ。人物標準は具體的事實なれば、兒童に理解し易くして興味多く、従つて感情を動かし、進で之に模せんとするに至る。且つや自國人よりその例をとらば大に國民的感情を養ふの利あり。されど理想的に完全なる人物は容易に得がたく、特に兒童に適切なる人物は最も求め難し偉人をとらば兒童即時に實行し得べくもあらず凡人をとらば崇敬の念に乏しく感化の効なし、況んや將來の道徳たる信用正義等の公德の實例は我國の古人より求めがたく、枉げて古人に附會せば實例を用ひし效なく、且つや例を古人にとる時は尙古の風に陥り、改良進歩

の念を薄うするものなれば、人物標準は一概に完全なりと云ふを得ず。徳目標準は抽象的の徳目を列擧するものなれば、兒童に領解しにくく、無味乾燥に流るる所より感情を動かしがたく、常に訓戒的にして兒童の倦厭を招くの憂ありと雖も、容易なる道徳より困難なる道徳と順を追ふて排列するを得べく、過去の道徳は勿論、現在並に將來に必要な道徳をも洩さず排列するを得れば、その長所亦侮るべからず。所詮は修身科の教材は徳目標準に従ふて易より難と進歩的の排列をなし、その徳目を説明せんために實例を古今内外の人物に取り、以て理解を助け感奮興起せしむべきなり。これ兩標準の長所を併せとりしものと云ふべし。然らばこ

これらの徳目を排列するに當り依るべき標準は何ぞや
 一に児童心意の發達階段に従ふべきなり。児童の心意
 は近より遠に及び、個體より概念に向ひ、具體より抽象
 に達するものなれば、初は身邊、家庭内、學校内に見はる
 る道德を主として説き、漸次にその範圍を擴めて社會
 國家に對するものに及ぶべく、要は児童心身の力よく
 理解し實行し得べき程度に従はざるべからず。

概要 修身科の教材は例話、訓辭、作法の三とす。これ第三種の教材は
 別々に授くるを得べきなれど、相關連して教ふるを勝れりとなす。模
 範たる人物の經歷より種々の道德を抽出して説明するを人物標準
 と云ひ、必要な徳目を次々に授くるを徳目標準といふ。何れも長短
 得失あれど徳目標準により教材を排列し、之を説明する爲に人物の
 例話を用ふるを宜しとす。徳目の排列は児童心身の發達階段に應ず

べきなり。

設問 修身科の教材を説明せよ。人物標準徳目標準の長短得失を
 論せよ。徳目排列は如何なる標準に従ふべきか。

第四節 教授の時間

修身科の教授時間數は教則の示す所に従へば、尋常一
 學年より高等三學年まで毎週二時間とす。而してかか
 る教科はよく教授事項を児童の心情に徹底せしめ、情
 操を喚發するを要するものなれば、心身の清新にして
 氣力の盛なる早朝に課するを必要とす。かつ一週間の
 一方に偏するを不可とするのみならず、時間は短くと
 も度々教授せらるるを利とすれば、尋常一二學年に於

ては三十分間づつ四回に分割し、これを月火木土の四日共に第一時に課すべし、而してその殘餘三十分は唱歌、遊戯、體操の如き精神の勞を慰するに足るものを課するを可なりとす。尋常三四學年以上高等小學校に至れば、教材漸く長く之を半時間に分割するは、教授の完結上不便少なからず。加ふるに心身次第に強健となり、靜座謹聽を要する修身科の教授にも、よく一時間の長きに勝え得るを以て、一時間に合して課するも妨なし。されどなるべくは一回は一時間の教授あるも、他は半時間づつ二回に分ちて之を課し、一時間を費す際に新に教授し、半時間るときには復習を行ひ、或は作法偶發事項を教材とするをよしとす。

概要 修身科の教授時數は小學校九學年を通じて毎週二時間なり、教授事項の心情に徹底せんことを望めば之を早朝に課し、特に幼年生には半時間づつに分ちて教へ、漸く進むに従ひ一時間に合すべし。

設問 修身科の教授は如何なる時を以て最も適當なりとするぞ。

修身科教授の時間割を作れ。

第五節 教授の階段

修身科の教授は多くの場合に於て五段の形式的階段を履むを得べし、されど材料の性質と兒童の既有の知識の如何によりて、必ずしも五段の順序に従ふを要せず、又五段に従ふも、いつも豫備、提示、比較、總括、應用の順序によらぬも、可なり。提示中に豫備あるべく比較しながら揭示することあるべく、揭示中に兒童の身にひき

くらべて思ひ廻らさしむべく、又材料次第にては兒童心中に比較、總括の自行オソツカラはるるものには提示、應用だけにても可なり、この邊の變通妙用自在なるべし、大方は次の順序に従ふ。

一、豫備 題目を通知して新教材を受納するに足る素地を作りて、現在意識に表はるる不用の觀念を排除し、以て期待の念を起さしめ、自動奮勵の状態に導き、さて新事實に關係ある兒童の既知の觀念を問答によりて復現せしむ。

二、提示 かかる豫備に基づき、明瞭なる言語、理解し易き語句を用ひ、音聲の緩急、抑揚、強弱に注意し、わざとならぬ身振、手眞似を以て巧に講演し、繪畫、標本等の

助によりて兒童をして身話中の人となり、自その境にあるが如く感ぜしめ、人物に對しては同情を寄せ、訓辭、作法、偶發事項等に對しては熱心に傾聽熟視し、活潑に批判せしむべきなり。さて時々問答を挟みては兒童自身の場合にあてはめしめ、適當なる區切りを求めては復演せしめ、以て教材の提示を終るべし。

三、比較 新教材間の前後の關係、原因結果の相應する所を問答し、或は反對の場合などを比較せしむ。

四、總括 新教材間の比較、新舊知識間の比較終らば、その間より一條の格言法則を概括すべし、教科書はこの段にて讀ましむるを可とす。

五、應用 かくて授けたる教訓を、直に實行し得べきも

のは實行せしむべく、高尚なる道德にして直に實行し難きものは、今の身分にて行ひ得べき範圍を考へしめ、或はかかる場合に處したるときに行動すべき方法を案出せしむ。

次にその教授案例を示す。

シヨージキ

尋常小學修身書第二學年

豫備

アナタ方の著て居る著物は誰が作りましたか。

御母さんはどこから買っておいでたでせう。

呉服屋とはどんな所ですか。

誰が居つて反物を賣りますか。

丁稚は何の爲に來て居るのでせう。

丁稚はしまいには何になるのでせう。

主人は何をするのですか。

今日は呉服屋のある丁稚が大そうよいことをしたお話を致しませう(題目通知)

提示

ある呉服屋へ、よその奥さんが反物を買ひにまいりました。何にしようとして買ひに來たのでせう。

皆さんの御母さんのやうに何か、子供に著物を作ってやらうとしたのでせう。

丁稚が見せました、澤山の反物をあれや、これやと選んで居りました。

なせそう澤山あれ、これと見くらべたと思ひますか、そんなに澤山、皆、買ふのでせうか。

なるべく柄のよい、また、丈夫なのを買はうとしたのです。

その中に澤山ある中から一反、氣にいったのをとりました、それを

買はうときめました、しかしその反物には、きずがあつたのですが、チョツと目につかないものですから、その奥さんは、之を知らずに、買ひ取つて、早く子供に仕立ててやらうと思ひました、
 丁稚は、その反物に、きずのあることを知って居りますから、奥さんに、きずのところをさして、これには、きずがありませんと教へました、

このとき掛圖を提出して

さあ、この繪をご覧なさい、これは誰ですか、こちらの奥に座つてチャンと店中を見まはして居るのは誰ですか、今丁稚は何をして居るのでせう、

この奥さんは、きずのあるといふことを話されて、どんな氣がしたと思ひますか、皆さんが奥さんならどんな氣がすると思ひますか、このとき主人はどう思つたでせう、主人の顔付をよくごらんさない、

今迄の所を誰か上手に話して下さい、(二三の生徒に復演せしむ)それで、この奥さんは、その反物はどうしたと思ひますか、之れを買はずに別の店から買つて返りました、

それから、この奥さんは、近じよの人や、親類の人に、その話をしましたところが、皆が大そうその丁稚をほめました、あそこの店に物を買ひに行くなら、あの丁稚から買ふがよいといふやうになりました、なせこの丁稚はほめられたでせう、なせこの丁稚から物を買ふがよいと云はれたでせう、

そのうちに、この丁稚がおとなになつて、自分で店を開くやうになりましたが、誰もかもこの丁稚の店に買ひに参りその店が大繁昌しまして、りっぱなあきんどになりました、

それはどう云ふわけだと思ひますか、皆さんが丁稚だとすればどうしますか、

今の所を話して見て下さい、始から話して下さい、

比較

その丁稚が、きずのあることを知らせなかつたなら、この奥さんはその反物をどうしたでせうか、知らずに買ふて戻って仕立ててから、きずのあることを知ったらどんな氣持がするでせうか、主人はなせ、そんなものを店に出しておいたと思ひますか、主人はなせ、こんな濼い様な顔をして居ると思ひます、きずの反物と知って居りながら、だまって賣るのはなせ悪いですか、どうしてこの丁稚は皆からほめられましたか、どうして丁稚の店は繁昌しましたか、きずのあるのをかくしてうる様な店はなせ繁昌しませんか、リッパなあきうどとはどう云ふ人を云ふのですか。

總括

この丁稚はどう云ふ人ですか、正直とはどう云ふことです、正直な人はしまひにはどうなりますか、ショーデキな人は立派の人にな

れます、正直ハ一生ノ寶といふ語があります。どう云ふことですか、書物を御出しなさい、そこを讀んでごらん。

應用

あなた方の中でうそを云つたことのある人はありませんか、この丁稚のやうにかくさずに人に知らせた人はありませんでしたか、

うそを云つてかくして居るときは、どんな氣持がしますか、

かくさずに正直に云つてしまったときは、どんな氣持がしますか、今日はこの丁稚にまねて丁寧な言葉のつかひ方をならひませう、

(人に物言ふときの目のつけどころ、姿勢、調子などの作法を授く)

概要 修身教授は多くの場合に於て豫備、提示、比較、總括、應用の五段を履むを得べし、豫備とは題目を通知して期待の念を促し、今そこに授くべき事項に關係ある既知の知識を復現せしめ、さて新材料を提示してその因果の關係を比較せしめ、一條の法則格言を抽出して實

行し得べきものは實行せしめ、然らざるものは想像上の行爲を營ましむ。
 設問 修身教授の階段を述べよ。

第六節 教授上注意すべき事柄

一、教師の模範　こは最も正確なる修身科の直觀教授なれば、何事も身を以てその實例を示し、兒童をして模倣せしむべきなり、これ千言萬語の教訓にまさる。
 二、反省の習慣　己が行爲につきて常に反省し、昨日の我と今日の我との優劣進退を競はしむるは、修徳上最もよき工夫なり。

三、模範人物の選擇　なるべく圓滿にして何れの點よ

り見るも缺くるなきものを取るべし、長短相半するが如きは好ましからず、かつその境遇の兒童に近きもの兒童の想像の及ぶべきものを可とし、現在若しくは將來に於て模倣し得らるる點につき十分なる説明を與ふべし。

四、順境の人物　我歴史上の人物は政治家、武人、門閥家、亂世の英雄多く、細事を顧みず小節に拘はらず、兎角兒童の模倣する能はざるもの多ければ、材料を種々の方面より取り實業に關係ある人、平常道徳を體せる人を求むべし。特に自然の境遇に成長せるものを取り、逆境に處せし人の場合は多からざるを可とす、その操守の變ぜざりし點を説きて感奮興起せしむる效あれど、常

に用ふべからず。
 五、勸善 善行を語て勸善するを主とし、殘忍不徳の場
 合を示して懲惡することを多からしむる勿れ、特に惡
 行の手段方法を示すが如きは、甚宜しからず、されど兒
 童に起り易き惡行を擧げて之を防ぐが如きは必要な
 る心掛なり。

六、境遇に適用 常に兒童の境遇に引きあて「諸子なら
 ば如何に感ずる」かかる場合は諸子は如何にするぞ」と
 問を發して活潑なる批判と感情とを促すべきなり。特
 に道徳心の基は同情にあれば「こういふ人は思ひ遣り
 のある人だろうか」「こんなことをして思ひ遣りがある
 と云はるるだろうか」などの問を發して深き同情を養

ふにつとむべし。

七、偶發事項 學校内外に起りし偶發事項は、すかさず
 教材に用ひて兒童の見聞の新なる間に批判し、感觸せ
 しめ實行を促すに至るべし。

八、公徳心 人を貴み人の財を重んじ如何なる細務に
 ても人の道ならば必履行するは公徳の要旨なれば、知
 人と知らぬ人とに差別なく、己が所有と他人の財とに
 關せず、之を尊み敬ふに至らしむべきなり。

九、靜肅謹聽 修身教授に際してはつとめて靜肅を要
 すれば、教師の言語舉動の温雅にして熱誠の表はるる
 を要し、又なるべく修身教授の爲に特別の設備ある教
 室を具へんことを要す。

一〇、教具の使用法 繪畫、掛圖等の提出時期は兒童の想像之に及び好奇心之に向ひ期待心の勃發せる頃を宜しとす。憤せずんば啓せずとはこの謂なり、かくして始めて印象を深からしむべきなり。掛圖及び讀本中の挿畫はなるべく鮮明にして兒童の想像を助くるに足るものたるべく、その説明もよく要點を洩さず、兒童の活潑なる想像を促すべきなり。

概要 修身教授は教師の模範を以て最も正確なる直觀教授となじ、教材となすべき模範人物は圓滿なる人物を多方面に求め、順境の人物を擧げて勸善するを主とすべし。偶發事項は直に採て訓誡の材料となすべく、教授の方法は兒童の境遇にあてはむる直觀的なるべく常に公德を重じ反省自競の習慣を養はしむるを要し、教室の靜肅は兒童の注意を紊亂せざらんため、教師の言動の溫雅にして誠實なる

は兒童の心情に徹底せしめんことを希へばなり。而して繪畫、掛圖等は鮮明にしてよく兒童の想像を助くるに足るものたるを要し、その提示時期は好奇心求智欲の勃發せる時機に於てすべきなり。

設問 修身教授に際し注意すべき條件を述べし。

第二章 國語科

第一節 國語教授の目的

言語とは人の思想感情を音聲に表はしたるものを云ひ、これを筆に寫して形に表はしたるは、即、文字にして文字を連ねて一連の思想感情を表はしたるもの、これ文章なり。これ等の言語、文字、文章は我國民の思想感情の交通機關なれば、これを國語といふ。國語教授は今日

普通に行はるる言語、文字、文章を授けて、他人の談話を耳にて聞き、文字、文章に表はしたるものを目にて見、而してその思想感情を理會し、かつ我思想感情を正確に口に語り文に綴り、かねてその發表を美妙にせんとす、これ國語教授の形式的目的なり、國語は言語、文字、文章なれば、必ずその中に含まるべき意味あり。されば言語、文章を使用するところより、知識の養料を得て、心意を發達せしむ猶、言語は血液よりも濃しといふ諺あるが如く、國語は國民を統一し國民的感情を養ふ、これ國語教授の實質的目的なり。これを要するに國語教授の目的は、音聲上、文字上、自國の言語を正しく理會し使用し、兼て國民の心情を陶冶し、知識を啓發するを目的とす。

概要

國語教授

形式的目的

普通の言語、日常須知の文字、文章の理會、正確に自己の思想を表彰する能を養ふ。

の目的

實質的目的

言語、文字、文章中に含まるる意味を知るより知徳を啓發す。

設問 國語教授の目的を述べし。

第二節 教授の材料

國語教授の材料は言語、文字、文章にあり。他人の言語文字、文章を解して誤なく、その思想を理會せんには言語の聴き方、文字文章の讀み方を知らしめざるべからず。己が思想を正確に表彰せしめんためには言語の話し方、文字の書き方、文章の綴り方を教へざるべからず。話し方を正確にせんには發音を練習すべく、聴き方、話し

方を誤なからしめんには語法の知識を要し文章を理會し、綴らんには文法を知らしむるを要す。かくの如く發音、言語、文字、文章、語法、文法は教授材料の形式的方面にして言語、文字、文章に含める修身、文學、法制、經濟、歴史、地理、理科、農業、商業、工業等の知識は、皆、實質的方面なり。

第一、形式的方面

發音 發音は言語の要素なれば、初歩の教授には特に留意し、正確にして、類似せる音をも混同するなからしむべし。我國は山脈國中を縱横に走りて幾多の小區劃をなし、加ふるに從來封建の制度は各地割據の生活をなし、交通機關の發達せざりしたため、從て彼我の來往少く、訛音頗多ければよく音韻學の示す所に從ひ、口形、舌

の位置等を授け正しき發音をなさしめざるべからず。言語 我國は氣候の相違、割據の生活、交通の不便の爲に各地に特有の言語を有す、これを方言といふ。方言は一地方に限りて用ひらるる言語なれば、之を統一して國內一般に用ひらるる標準語に改めしめざるべからず。標準語とは東京の中流以上に用ひらるる言語の發音及び語法を指す、是、東京の中流以上に用ゐらるる語は、各地より集まりし人の持ち寄せの語なれば、最も全國に通じ易く、又全國に普及すべき便宜と運命とを有するものなれば、國語讀本はこの語を採用せしなり。文字 音聲を筆に寫したるものは文字なり、我國には假名と漢字とあり、假名は音を表はせる音標文字にて

漢字は意を示せる意表文字なり。假名には平假名、片假名の二種あり、漢字には楷行草の三體あり、審美上誦讀上には平假名をよしとし、書寫上實用上は片假名を便となす。將來は時間、勞力の經濟上、片假名單用とならんも、今は暫く並用せざるべからず。尋常一學年には片假名のみを授け、第二學年に至りて平假名を授け、その後には並用すべし。平假名に正體變體の別あり。兒童の書寫上には、まづ正體假名を用ひしむべしと雖も、漸くその使用に熟するに従ひ、變體假名をも加へ授くべきなり。漢字は數字を除く外は平假名を教へたる後、第二學年の中頃より始め、第四學年まで約五百字を授け、第五學年より順次その數を増加し、第六學年迄には三百五

十餘字を増し、高等科に至り、更に増加せるも、義務教育延長の結果、猶相當の増加をなさんとするに至れり。書き方に用ふる書體は楷行二體を主とす。尋常第四年の前半期迄は楷書の一體に限り、後半期より行書を授く、これより上級は行書を主とし、終に草書を加ふ。手本の文字は讀本にて授けたる中よりとり、その間架結構の模範的のものたるを要す。

文章 文章には今日の言語をそのまま寫せる口語體と、中古の言語にして今日は談話に用ひられざる文語體とあり、將來に於ては口語體の用益、加はるべきなれど、今は兩體を並用せざるべからず。國定讀本には第一冊(尋常一學年用)より第五冊(尋常三學年前半期用)まで

は悉く口語を用ひたり、而して兒童の境遇は同輩に對するよりも長上に對する場合多き故に、第五冊の第八課迄は韻文及び獨思、獨語、引用の文を除く外、總て崇敬體を用ひ、第九課より始めて常體を用ひ、他日文語に移る階梯とせり。文語は第六冊(尋常三學年後半期用)より、候文は第七冊(尋常四年前半期用)より提示せり、されど是等は單に讀み、かつ、理解する力を養ふを旨とせる者にして、綴り方には一切口語を用ひしむるを目的としたり。第五學年以上に用ふべき讀本に至りては漸く口語體の數を減少し文語體の數増加せり。

語法文法 語法は言語の規則を示し、文法は文章の法則を明にするものなれば、讀み方、話し方、綴り方の練習

に際し、歸納的に之を授けざるべからず。

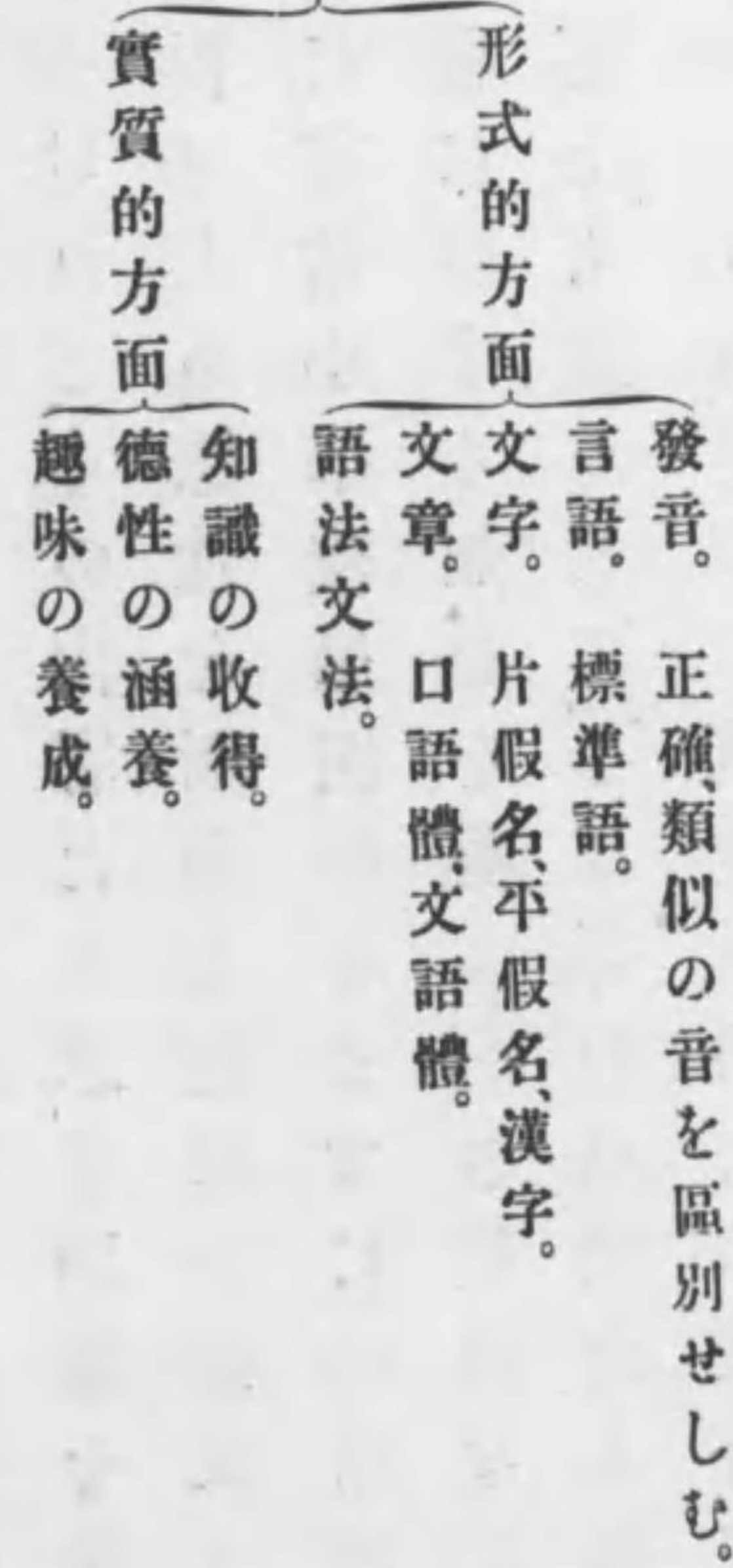
第二、實質的方面

國語教授の主要目的は言語、文字、文章の理會發表の形式的方面にあるべけれど、その内容たる思想感情を授與して知識を收得せしめ、徳性を涵養し趣味を養成せざるべからず、特に尋常小學校第四學年までには算理、歴史、理科等の實質に關する知識を與ふべき教科なければ、國語科は内容をも重んじて、これ等の基礎たる知識をも與へざるべからず。されば國定教科書は修身、理科、地理、歴史、法制、經濟、實業等あらゆる方面より材料をとり來り、その排列は兒童心意の發達の度に應ぜしめ、兒童に親近なる家庭の材料より漸次郷土及び國家の

材料に及べり。各教科に屬する材料を交互に排列して趣味の新ならんことを求め、材料の内容に關係を求めて相互を聯絡せしめたり。

概要

國語教授の材料



設問 國語教授の材料を述べし。

第三節 教授の時間

國語科は小學校の基本教科にして、もとより必修正科なり。毎週教授時數は尋常一學年十時間、二學年十二、三、四學年は十四時間とし、第五第六學年十時間、高等一、二、三學年八時間の規定なり。而して讀み方、書き方、綴り方は互に聯絡して授くべきものなりと雖も、各主とする所に從ひ教授時間を異にするを得べし、發音、聽き方、話し方は主として讀み方と同時に練習し、語法、文法は多く讀み方綴り方に附帶して授くべければ大略の時間配當標準は次の如くなるべし。

分學年	尋常科						高等科		
	一學年	二學年	三學年	四學年	五學年	六學年	一學年	二學年	三學年
讀み方	七	七	八	八	六	六	四	四	四
話し方									

綴り方	書き方
二	三
三	三
三	三
二	二
二	二
二	二
二	二
二	二

設問 國語教授の時間を分科に配當せよ。

第四節 教授の方法

第一項 読み方教授

第一 教授の目的

読み方の教授の目的は、文字文章を見て、正しく之を読み、その中に含める思想感情を誤なく、理解せしめんとするにあり。

第二 教授の材料

こは既に述べたれば再、之を繰返さず。

第三 教授の階段

一、豫備

(1) 豫備的問答 これ内容の豫備にして大體如何なる事項が書かれあるかを知らしめて、児童をして讀まんとする希望を起さしめんとするものなれど、事項、頗、平易にして一讀せば直にその大意を解し得る程のものにはかかる手段を要せず、唯内容頗、困難なるか、又は詳細なる説明をなすべき必要あるも、他に教授すべき學科なき場合には、必ず之を行はざるべからず。

(2) 摘書 こは形式の豫備にして、文字、文句等を豫じ

め、摘出して全體を讀過する準備をなすものなり。摘書は内容の豫備をなすに當り、連絡を有するものに限る、漸次摘出して知らしむべく、かかる關係なきものは強ひて之を掲ぐるに及ばず。

二、提示

(1) 素讀 教師が一二度素讀し聞かすこともあるべけれど、多くは優等生の讀み得るものより順次讀ましめ、劣等生に及ぼすを可とす、教師の素讀する場合には全文を朗讀一過することなく、兒童をして教師と共に讀み碎く心掛あらしめ、難字難句等につき問答を挟みて大意を考へしむべし。

(2) 大意演述 一二人の生徒、素讀せる後はその大意

を語らしめ、つとめて素讀と意味を考ふることをとを並行せしむ。

(3) 質問 かくすること數回の後、大方、素讀と大意とを了解せし頃、自由なる質問を許すべし。

(4) 深究 教師より種々の質問を發して眞に理解せしか否かを試み或は要領を説話せしめ、進んでは問答により文法上修辭上の知識を啓發す。

(5) 朗讀 讀み方には淀みなく流暢に讀む機械的讀方、理義會通して聽者を合點せしむる論理的讀方と抑揚頓挫の美を表はす審美的讀方とあり。もとより材料次第なるも意味の十分に理解せる後は漸く審美的讀方に向はしむべし。

(6) 書取 難字、難句を確實に把住せしめんが爲め、讀本より寫し取り、或は教師の口授を寫し取る等種々あり。

三、應用

新なる語句の言ひ表はし方を練習し、文法の類例をあげしめ、或は文語を口語に、口語を文語に書き改めしめ、又は異なる材料により、今學びし形式に準じて、書き綴らしむるなど種々あるべし。

次に實地の教授案例を示す。

教授案例

尋常小學讀本卷六第十三課

商業

一、豫備

あなた方のつかふ筆や墨はどこから買うて來ましたか、

文房具屋では自分の家で筆や墨を作るでせうか、外から澤山一緒に受けて來る、その卸賣をする店は何と云ひますか、問屋、その問屋から受けて皆さんに小賣をするのですが、何が目あてでそんなことをするのです錢をまうけやうとして、錢をまうけるが目あてに、物品を問屋から受けて小賣をするを何と云ひますか、商業、商業は誰にでもすぐ出來ますか、

商家にいつて見習をせねばなりません、

あなた方は筆や墨を買ふならどういふ店から、買はうと思ひますか、正直な店から、

かかる説話と共に圈點を附せる、文字を摘書し、問答終れる後、讀ましめ意義を確む。

二、提示

1. 素讀 誰か讀めますか静かに讀んでごらん。

2. 大意演述 初の一節はどんなことが書いてありますか、その次

は………も一度読んでごらん、

3. 質問 さ、何でも質問がありませんか、

4. 深究 太郎の兄さんはどこへ行って居ったのですか、今どうして返つて来たのですか、太郎は何を尋ねました、兄さんはどういふ答をしましたか、誰か兄さんに代つて商業といふことを説明して下さい、なせ正直にすれば、銭がまうかりますか、人がたくさん買つてくれればなせまうかりますか、

5. 朗讀 こん度、甲さんが太郎となり、乙さんが兄さんとなつたつもりで、この通り御話して下さい、

6. 書取 私の云ふ通りに書いて下さい、

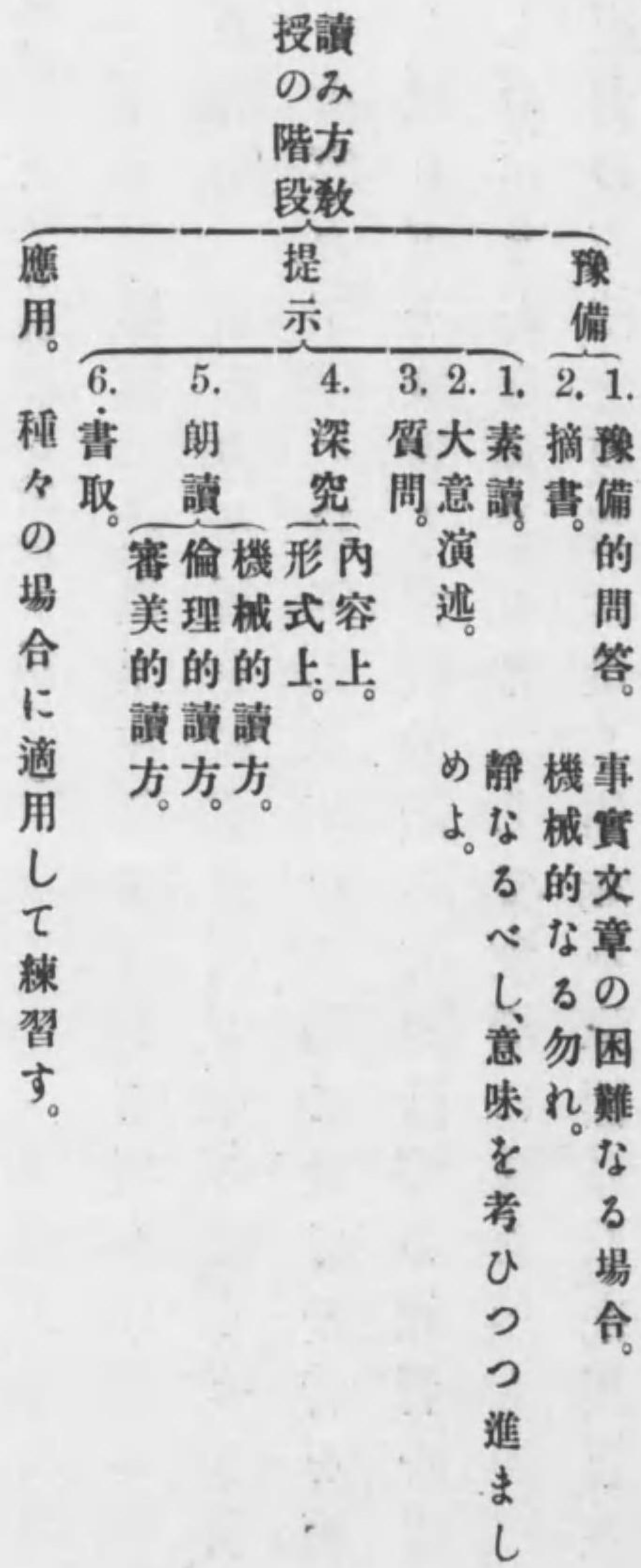
呉服屋に商業のしかたの見習にいつてゐます、
米屋の主人。
織物の卸賣。
銭がまうかりません。正直な石油屋。

三、應用

米のできるところから、たくさん米を買ひあつめて諸方の米屋に賣る、——を文語におなほしなさい、

「いつてゐらっしゃる」と云ふ辭は、どういふときにつかへますか、いつ何かにあてはめてつかつてごらん、

概要



設問 読み方教授の階段を述べよ。

第四 教授上注意すべき事項

一、著眼點 読み方教授を施す前、先づ、その授くべき教材の内容を丁寧吟味し、如何なる點に於て發音を練習し、聽き方を練習し、審美的読み方、對話等の練習をなさしむべきかを豫じめ考定して教場に臨むべし。

二、復習の方法 復習は最も知識を鞏固にし、應用自在ならしむるを得るものなれば、教師は常に意を注ぐべき内容形式の諸點に著眼し、千遍一律の機械的復習をなすなく、ある個所は文字を復習し、ある個所は朗讀せしめ、或個所は語法上の説明をなすなど、適當の所に適當の方法を行ひ變化あらしむべきなり。

三、新聞雜誌旅行記 などの適當の個所を抽出して讀み聞かせ、若しくは讀ませて讀書の興味を増さしむべし。

第二項 綴り方教授

第一、教授の目的 綴り方教授の目的は、文字に依りて正しく、かつ、巧みに思想感情を發表する技能を得しむるにあり。

第二、教授の材料 言文の懸隔、今日の如く甚しきは極めて思想上の不經濟なれば、追々は文章漸く言語に近づき、言語も文章に近づきて、やがては、言文相似たる體とならざるべからざることながら、今の現在にては談

話體の外に尙普通文體、候文體の二を知らしめざるべからず、されば普通文體は尋常小學讀本第六より、候文體は第七より漸く讀本中に挿入して、他人の書けるものを理解せしむる力を養へども、自綴り出さしむるものは全く談話體なるべきなれど、尋常五學年以上に於ては文章體を加へ、高等科に至りては更に候文體をも綴らしむべき、その割合は大凡左の如くなるべし。

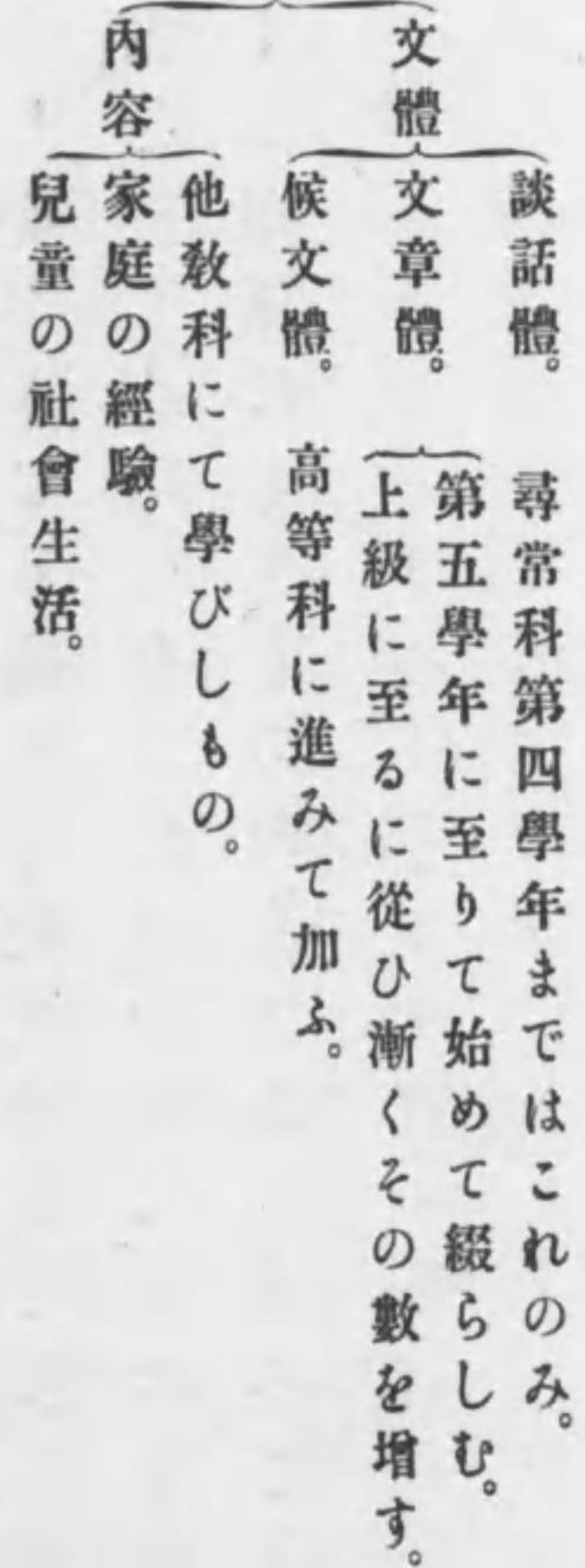
	尋常五學年	尋常六學年	高等一學年	高等二學年	高等三學年
談話體	八	七	五	五	四
普通體	二	三	四	四	四
候文體	〇	〇	一	一	二

以上は文體につきて述べたるなれど、その文體にて取

扱ふべき内容を何れに求むべきかを考へざるべからず、綴り方は發表の學科にして新に思想を與ふるものにあらねばその思想は兒童の既に有せるものならざるべからず、されば國語讀本修身、地理、歴史、理科等にて學びたる材料より取り來り、或は兒童の家庭に於ける種々の出來事、旅行、遠足、運動會等云はば兒童の實際生活せしものを材料として取り來り、喜び樂んで之を綴るに至らしむべきなり。綴り方教授のつとむる所は、思想の發表を正しく巧になすには、如何にすべきかの方法に關する知識にして、その内容にあらざることを誤るべからず。

概要

材料



設問 綴り方教授の内容は何れに求むべきか。談話體、文章體、候文體を課すべき割合を示せ。

第三、綴り方の種類 綴り方には、内容と形式との二要素あり、即、何を書くべきかと思想を限定し、さて之を如何なる順序に置くべきかと思想の順序を定めざるべからず。この二者は内容に屬し之を發表するには如何なる文字を用ひ、如何なる文體に従ふべきかは形式な

り。この二要素の關係より綴り方教授に四種類を生ず。第一類 内容と形式と二つながら與ふるもの。讀本その他の文字、文句、文章をその儘に寫し取る視寫法の如きこれなり。

第二類 内容のみを與へ形式を工夫せしむるもの。

1、他人の談話を聞きて之をそのまま、或は文語體に書き取らしむる聽寫法は、書くべきことの意味を知らしめて、これに相當する文字を工夫せしむるものなればこの類なり。

2、改作法 談話體を文語體に文語體を談話體に、記事文を日用文に、詩歌を散文に改作せしむるもの。

3、縮約法 原文を縮約するもの。

4、敷延法 原文を敷延するもの。
 第三類 形式のみを與へて内容を工夫せしむるもの。
 1、範文法 模範文を示して他の場合に活用せしむ。
 2、文段のみを與ふるもの。
 第四類 形式、内容二つながら與へざるもの。
 1、文題を與ふるもの。
 2、随意に文題を選ばしむるもの。
 綴り方教授の大體の順序は、初は第一類多く、次に第二類、第三類、第四類に進むべきなれど、確然たる區劃あるにあらず、兒童の熟知せる材料を既知の文體を用ひて、自力を以て綴る習慣を養はんこと必要なり。

概要

綴り方の種類
 形式内容共に與ふるもの。 視寫法。
 内容のみを與ふるもの。 聽寫法、改作法、縮約法、敷延法。
 形式のみを與ふるもの。 範文法、文段提示法。
 形式内容共に與へぬもの。 文題を課するもの、文題を隨意にするもの。

四種類は相交へて用ふべし。

設問 綴り方の種類を擧げて、その區別の標準を述べよ。

第四、教授の時間 尋常一學年に於ては綴り方教授の爲に特に時間を割かず、讀み方、話し方、書き方と聯絡して施すべく、尋常第二學年毎週二時間、三四學年三時間、五六學年以上高等科は總て二時間を配當すべし。されど活用の便をはかり、必ずしも、その日、その時と確定せずして國語教材の進捗につれて、便宜國語の時間を使用すべきなり。

設問 綴り方教授の時間配當をなせ。

第五、教授の階段

- 一、出題 目的の指示に當るもの、児童をして進んで綴らんとする奮發心を起さしめざるべからず、これには児童のよく了解して興味ある文題を提出するを要す。
- 二、豫備 既有的の觀念につき多少の問答をなし、有用なる文字を摘書す、綴り方は發表の學科にして教授の學科にあらねば、豫備は短時間にて足れり。
- 三、起稿 児童各自をして稿を起さしむ。その間教師は机間を巡視して誤れる個所に注意を促す。
- 四、批評添削 添削には板上添削、簿上添削の二法あり、板上添削は二三児童の所作を黑板上に寫して、全級兒

童と共に批評するものを云ふ。板上添削に採用する文章は大體の結構に於ては非難すべき點なきも細目に於て缺點ある中等のものを選ぶべし。優等のものは批正の餘地なく劣等のものは添削の個所多きに過ぎて時間を空費する恐あり。訂正には誤字、脱落等逐一に進み一時に多岐に亙るべからず。簿上添削は児童の帳簿に記載せるものにつきて行ふもの添削の最も完全なるものなり。添削は甚、拙劣なる個所の外、なるべく原意を維持して生徒の工夫に任せ、特に善美の點は洩さず賞揚すべし。

概要

一、出題。児童のよく理解して興味ある文題。

綴り方教授の階段

- 二、豫備。 思想を限定し、順序を立つる爲めの問答。
- 三、起稿。
- 四、批評添削。 板上添削。 簿上添削。

設問 綴り方教授の階段を記せ。添削に關し注意すべき條項を述べよ。

次に實地の教授案例を示す。

一、出題

尋常三學年綴り方教授案 (國語讀本第六の教材による)

この間は讀本では、どんなことを習ひましたか。
 (太郎さんの兄さんと、太郎さんのお話でありました、)
 何の話でしたか、(商業の)
 讀本には二人の兄弟の話になつて居りますが、今日は一つ、そのお話の中から商業といふことを綴りませう 出題

二、豫備

太郎の兄さんは太郎に商業とはどう云ふものだと教へましたか
 商業は何のためにするのでしたか、
 二年のときに習つた、呉服屋の丁稚がきずのある布を客に知らせた話をしてごらん、なせその丁稚の店は繁昌しましたが、
 なせ正直でないと店は繁昌しませんか、
 (正直でないと、人は一度や二度は買ひに来るが、こりて、あとは來ないから)
 そうすると商業をするに何が第一ばん大切ですか。
 始からずつと云ふてごらん、

三、起稿

今云ふたことを間違はせない様にかくのです(第二類)
 教師机中を巡視して誤謬を指摘す。

四、批評添削

次の如き文を得たり。

「品物を賣つたり、買つたりすることを商業といひます、商業は錢
まうけのためにするのですが、商業をしたからといって、きつと
錢がまうかるにきまりません、正直でないといふと、買へば、それき
り、こりて買ひに来る人はありません、正直にすると、人がたくさ
ん買ひに来ますから、すこしづつもうけても錢がまうかります、
商業には正直が第一であります。」

これを黑板上に寫し、再三讀ましめ、さて、誤字はなきや、口調の悪し
き所はなきや、商業といふ字が、何度もくりかへされて居るが何と
か、仕方がありませんかなど問ひ、讀ませては訂正すべし、訂正し終
らば筆記帳に寫さしめて點檢す。

第六、教授上注意すべき事項

一、徐々漸進 一時に名文を作らしめんとあせるなか

れ、兒童の自然の發達に従ふて徐々に進むべし。先づ既
知の文字を自由に使役する能を得しめ、次には自己の
思想を滞りなく發表するに至り、更に進んでは敘述の
順序に注意せしめ、輕重本末を考へしめ、漸く修飾して
巧妙の域に至らしむべく、漸を以て進むべきなり。

二、兒童の得意 綴り方は發表の教科なればつとめて
兒童をして得意ならしむべし、添削を嚴にし或は教師
の檢閲の不行届の如きは自暴自棄等に陥らしむ。

三、思想整頓、言語練習 文題も内容も子供らしかるべ
く、思想充分整頓せられ、巧に口に發表せらるるものに
あらねば、文に綴る能はざるなり、意至つて筆之に従ふ
とは古今の名言なるを知れ。

設問 綴り方教授に當り注意すべき個條を擧げよ。

第三項 話し方教授

第一、教授の目的 言語によりて正確に優美に、己が思想を發表する能を養はんとするのみならず、これによりて翻てその思想をも正確ならしめんとするものなり。

第二、教授の材料 主として讀本中より、その材料をとるべきなれど、修身、地理、歴史、算術、理科何れの學科よりも求め得べく、その他家庭にて聞きたるお伽噺類或は兒童日常の經驗談皆材料たるを得べし。

第三、話し方の種類 話し方には唯一人にて演說せし

むる獨演式と、教師と生徒、又は生徒の二人或は三人にて對話せしむる對話式と、二組又は三組に分れて討論する討論式とあり。何れも材料の性質によりて適否あるものなれば、これが運用を誤らず種々の方式を用ふるを可とす。

第四、教授の時間 話し方の練習は讀み方教授に附帶して行ふを本則とし、その他、修身、歴史、地理、算術等の學科に於ても一たび會得せし所は、つとめて言語に發表せしむべきなり。されば幼年生には特に話し方の時間を設くる必要なく、便宜授業時中に於て適當なる場合に練習せしむべし、これ教授に變化を來して倦厭を招く恐も少なく、話し手は材料に窮せず、聞き手は批評の

耳を以て聞くを得。かつ、既修の知識を確實にするの利あり。されど高等科に至れば讀本の材料も長ければ、讀み方教授時間中に十分に話し方を練習することなし難く、又談話、長時間に亙るも生徒の倦厭を招く程のこともなければ、特に話し方の時間を設け、毎週一回半時間位を定むるを宜しとす、もとより話し方の練習は常に機會を求めて意を注ぐべく、雨天にして戶外運動に適せぬとき、運動會、遠足、郊外教授の場合等その機會多かるべく、特に談話會を開きて練習せしむるも亦、甚、可なりとす。

第五、教授の階段

1、目的指示 話し方の練習を行ふ由を告ぐ。

2、豫備 兒童の思想發達せざる間は教師の話し様に眞似しめ、或は話すべき事柄の大意を授けて、その内容より自由に敷衍し省略し復演せしむるあり、或は段落を示して、その形式に従ふて談話せしむる場合などには豫備を要すれど、多くはこれを省くを常とす。

3、談話 談話の際、中途を遮り或は急き立つる等の事なく、よく兒童をして落つきて談話せしむべし。

4、批評 批評はなるべく寛大にし、決して一言一句を嚴密に責むべからず。形式にても内容にても善美の點あらば之を賞揚して鼓舞すべし。批評の要點とすべきは姿勢、發音、調節、言語の修飾、語法、身振等の諸點にありとす。

5、練習 批評の後、同一の児童をして反復せしめ或は他の児童をして反復せしむ。

概要

目的	優美正確に思想を發表する能。言語に發表するにより思想を正確にす。
材料	讀本中及び他の教科中。児童の見聞交際して得たるもの。
種類	獨演式。對話式。討論式。
時間	幼年生には特に設けず。上級には一週、半時間を設く。
1、目的指示。	
2、豫備。	
3、談話。	中途を遮るなし、急き立つる勿れ。落付て話さしめよ。

話し方

階段 4、批評。

寛大なれ善美の點を賞揚せよ。批評の要點、姿勢、發音、調節、言語の修飾。語法、身振等。

5、練習。

設問 話し方教授の材料を擧げよ。話し方教授の種類を説明すべし。話し方教授の階段を記せ。話し方を批評すべき要點を問ふ。

第四項 文法教授

第一、教授の目的 言語文章の法則を理解せしめ、以て正しき言語文章を用ひしめんとするにあり。されば、ここに文法といふは、語法文法の雙方を含めるにて、もし児童をしてかかる法則を辨へしめざれば、方言訛語の影響に抵抗して正當なる國語を使用せしめんこと甚、

難しとする所なりとす、これ特にかかる教授を要する所以なり。

第二、教授の材料 文法の材料はもとより單語、文章なれば品詞の名稱、意義、文章の構造、職能を明にすべきなり。即、名詞、代名詞、動詞(活用、性、法、音便)、形容詞(活用、音便)、助動詞(時、法)、副詞、接續詞、てにをは、係り結び、感歎詞の名稱、意義、職能を授け、文章は主部、客部、説明部、單文、複文につきて大體の意義を知らしむ。

口語法は我國標準語の定まらぬ今日、未だ、一定せるものあらねば組織的に教授すること困難なれど、文法と比較して特に混じり易く、誤り易きものにつき、兩々、相對比して差違の存する所を明ならしむる外、その道なからべし。

るべし。

第三、教授時間 文法教授の必要なるは論なけれど、兒童心意の發達に應じ、尋常科下年級に於ては読み方、綴り方、話し方教授に表はれたる言葉の意義用法を随時に説明して敢て文法上の系統を追はざるべし。五六學年に至りては読み方、綴り方、話し方教授の際に表はれたる言葉を材料とし、一定の案を具へて、歸納的に文法の知識を授くべし。高等科に至りて始めて特別に時間を割きて、系統的に文法上の知識を授くべきなり。これが爲めには一週一時間を充つるを要すべく、尋常五六學年に於て特に文法教授時間を設けず、読み方綴り方に附帶して授くる場合にも約一時間を費すものと心

得べきなり。

第四、教授の階段 文法教授は法則概念を發見せしむるものなれば、五段の形式的階段に隨ふを得べし。

一、豫備 今授けんとする文法に關する舊觀念を問答により喚起す。

二、提示 かかる豫備に基づきて新教材を提出す。

三、比較 今授けたる文法の相互の間の關係を比較せしめ、或はこれを舊知識と比較せしめて總括に導く。

四、總括 文法上の法則理法を抽象して口に述べしむ。

五、應用 今抽出したる法則に従ひ文章を作らしめ、或は讀本中より類例を求めしむ。

次に教授案例を示す。

高等科第二學年の文法教授案例(過去の助動詞「けり、き」の用法)

一、豫備

今、月が出たといふことは文語では何とかききますか、

外に書き方はありませんか、

まだ外にはありませんか、

月といふは詞の類から云へば何ですか、

出では何ですか、

ぬは、

外に助動詞はありませんか、

なせ、これらを助動詞と云ひますか、

ぬ、つ、たり、を動詞につければどう云ふ意味になるのですか、今その動作がちやうどすんだことを示します。

そ、う、い、ふ、の、を、何、の、助、動、詞、と、い、ひ、ま、す、か、

現在完了の助動詞、

月出でぬ、
月出でつ、

月出でたり、

名詞、

動詞、

助動詞、

つ、たり、

二、提示

それでは昨日は雨がふつたと云ふことは、どうかききますか、昨日雨ふりき、
雨降りぬとはどこが違ひますか、ふりきより外にかき方はありませんか、
山の櫻花がもうちつてしまったとはどうかききますか、

山の櫻花はやりけり、

ここではどれが名詞ですか、動詞は、助動詞は、……

きやけりは何をさして居るですか、

過ぎ去つた動作を、

それを何といつたらよいでせう、

過去の助動詞、

そうです過去の助動詞は口語の……してしまつたにあたります、

三、比數 戦終りきと戦終りけりとは意味が違ひますか、

花散りぬと散りきとは、月落ちつと月落ちけりとは、戦勝ちたりと戦勝ちけりとは、

四、總括 過去の助動詞を云ふてごらん、けり、き、

五、應用 もう汽車が出てしまつた、

罐が立ってしまった、

この間讀んだ讀本の中から過去の助動詞を見つけ出しなさい、

概要

話授方		目的	材料	時間
高等科	尋常科五	一、正しき言語文章を使用せしめんため、 二、方言訛語の影響に抵抗せしめんため、 品詞の名詞、意義、職能とその辨別、 文章の構造と、その部分の名稱、 文法と異なる主要なるところ、 文法と混じり易く、誤り易きもの、	一、文法。 二、語法。	尋常科四
	六學年			尋常科五
高等科	高等科	読み方、綴り方、話し方の際に随時に説明して誤を防ぐ。 読み方、綴り方、話し方に附帯して授くるも、教師に一定の案あり。 文法を系統的に授く、毎週一時間を費す。		

〔階段五段の形式的階段に従ふを得。〕

設問 文法教授の目的を問ふ。文法教授は何時より始むべきか、文法教授の材料を述べよ。文法教授の階段を説明すべし。

第五項 書き方教授

第一、教授の目的 文字を正しく美はしく書かしめ、以て審美心を養成し、且つ、筋肉を練習して手指の運用を巧ならしめんとす、その實用上の價值は殊更に云ふ迄もなきなり。

第二、教授の材料 教材の資料は讀本中にて授けたるものを採用し、ある少數のもの外は、この以外に取ら

ざるを可とす。國定書き方手本に於ては、尋常科に於ては總べて尋常小學讀本に出でたる者を取り、高等小學校用のものには讀本の材料以外よりも文字の結構運筆の方法を了解するに便なるものを選択して、教授上の變化を圖れる個所少からず。文字は初は大字を書かしめ主として兒童をして字形を正しく書き、且つ、筆法を理解するに便ならしめ、進みて細字を交へ書寫に熟達せしむべし。されば尋常二年頃迄は大字を主とし、三年以後に至り漸く細字をも交ふべし。大字の字數は大方左の標準によるを可なりとす。

尋常一年
尋常二年
手本の二頁を半紙半枚に書く、

細字、平假名の續け書、書簡文等の字數は一定せず、縦紙二つ折に、手本の一頁を書く割合たるべし。

尋常三年

尋常四、五、六年 手本の二頁を半紙半枚に二度くりかへす。

高等一、二年

高等三年 前項に準ず。

清書の度數は一週一度にて可なるも、尋常五學年以上にては一週半一度にて可なり。

字體は楷行の二體を主とす、尋常四年の後半期より行書を加へ、五六學年以上高等科にては細字の一部分を楷書となせる外、總べて行書を習はしむべしと雖も、第三學年に至りては草書をも加へ課すべきなり。

第三、書き方の時間 尋常科下級は毎週三時間を充て

五學年以上高等科は二時間を以て適度とす。

第四、教授の階段

- (一) 用具準備 墨をすり筆、習字帖、手本の位置を正す。
- (二) 示範、説明 先づ読み方意義を問答したる後、教師筆を以て紙又は板の上に書し、大體の位置、部分の位置、力の入れ所等につきて説明す。
- (三) 練習 兒童をして手本の模範と教師の説明とにより習はしむ、習はしむべき文字の數は難易によりて一定せず、説明を要すること多き文字は少なく、特に説明を要せざるものは多くして可なり。
- (四) 批正 朱硯と朱筆とを持し、毎時必ず訂正批評すべし、一時に、あらゆる點を正しうせんことを欲する

勿れ、一點づつ徐々に匡正せよ、而して清書に際してはあまりに批正して奮發心を害するなかるべし。左に教授案例を示す。

尋常科第五學年書き方教授案

一、教材

高等小學書き方手本。

第一學年用上十一頁。

軍隊より忠義まで。

二、目的

教材の字形字行及び運筆を正確に會得せしめ、且つ美感を養ふにあり。

三、準備

イ、書き方用具は放課時中に出さしめ、當番をして配水せしめ置く。

ロ、墨を磨らしむ。

ハ、筆を潤さしむ。

四、教法

一、読み方意義の復習をなし次に目的を指示す。

イ、この前にはどこまで習ひしか。

ロ、誰か読んでごらん。

ハ、さあ、その次は読み得ますか。

ニ、軍隊とは如何……忠義とは……

ホ、今日はこんな大事な字を習ひませう。先づ軍の字から稽古しませう。

ニ、筆順間架結構筆法等を順次説明しつつ範書し一字づつ練習せしむること左の如し。

1、軍——中央と横間と力の入れどころとに注意せよ。

示範及び説明し練習せしむ。

2、隊——右は大になり、左は小になり。

- 示範説明して練習せしむ。
- 3、戰横間と戈法とに注意を與へて。
範書し練習せしむ。
- 4、争は既に授けたる楷書の争と比較して後。範書して練習せしむ。
- 5、忠中心の點に注意せよ。示範説明をなし練習せしむ。
- 6、義筆順 中央の縦線を先にす、横間と中央に注意せよ。示範説明をなし練習せしむ。
- 三、各兒童をして手本と比較して訂正せしむ。
- 四、札間巡視の後、板上にて説明す。
- 五、よく手本を見てごらん、軍の字に力の這入つてゐる所がどこか、今度は少し勢よく書きませうこの段筆筆法「戈」等について勢に注意し練習せしむ。
- 示範説明し二字づつ練習せしむ。

概要

- 六、机間巡視 訂正
- 七、通して練習せしむ。此の際半紙に範書せしものを提出し、字の大きさ及び字形に注意せしむ。
- 八、草紙により、批評訂正せしむ。
- 九、下清書を命ず。手本との比較
- 一〇、收具、各列毎に一箇所に集めて筆を洗はしむ。

目的 文字の正確、優美、筋肉修練。

材料 内容。主として讀本中よりとる、
 大小。尋常一二年は大字のみ、三學年より漸次細字を加ふ。
 字體。尋常三年迄は楷書のみ、四學年より行書を加へ、高等科は主として行書なり終に草書を加ふ。

時間 四學年以下一週三時間。 清書。 每週一回。
 五學年以上一週二時間。 清書。 三週二回。

階段
 一、用具準備。
 二、示範説明。
 三、練習。
 四、批正。

設問 書き方教授の材料を述べよ。 書き方教授の階段につきて
 記せ。

第三章 算術科

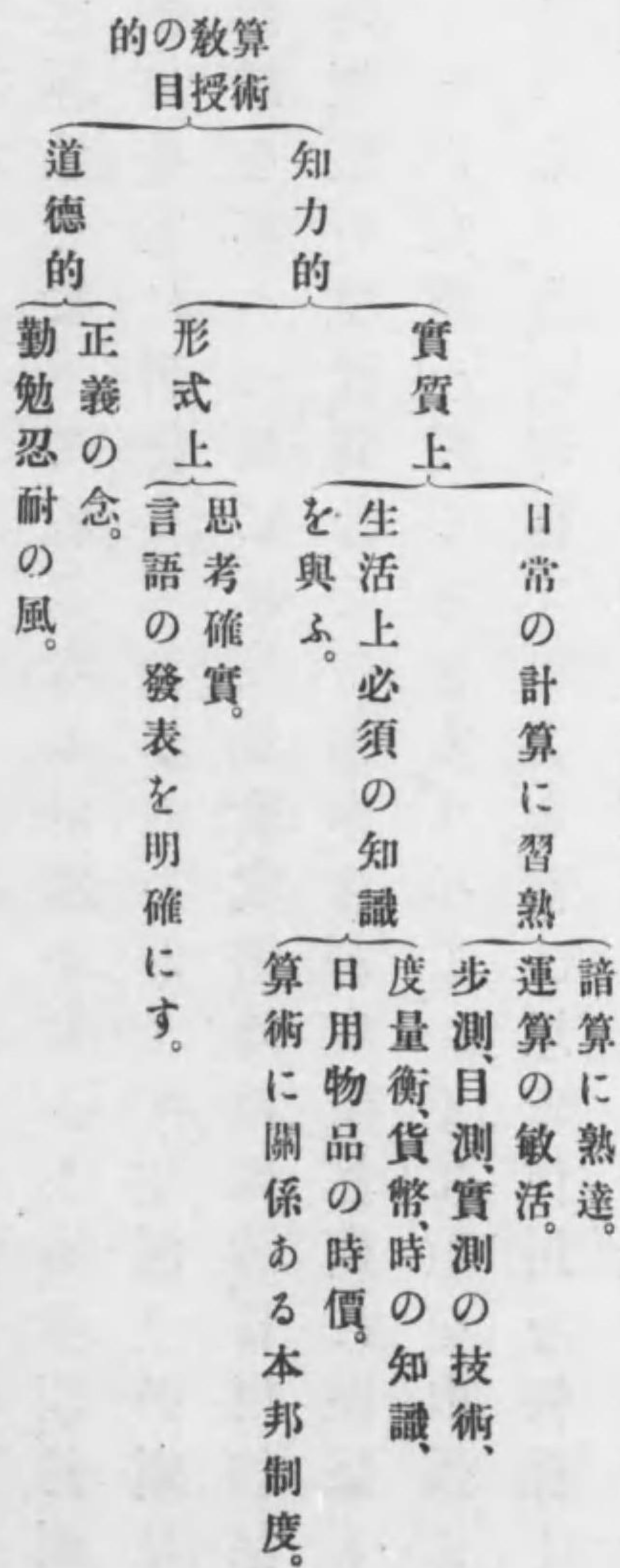
第一節 算術教授の目的

算術科は日常の計算に習熟せしめて、實地生活の用に供し、數の表はるる事物及其の關係を知らしむる所より、生活上必須の知識を與へ同時に心意を鍛鍊して思考を精確ならしむるを目的とす。前二者は算術科の實

質的價値に屬し、後者はその形式的價値なりとす。日常の計算に習熟せしむる爲には、諸算に熟達せしめ、簡易なる計算は總べて之によりて辨ぜしむべく、筆算、珠算の運算法を授けて敏活なる計算をなさしめ、步測、目測、實測の技能に習熟せしめざるべからず。生活上必須なる知識を與へん爲には、度量衡、貨幣、時の知識、日用物品の時價、銀行、租税、爲替その他本邦制度中算術に關係あることの知識を授くるを要すべく、かくて數を取扱ふところより、自、推理斷定の力を養ひ、思考作用を修練し、その思考せる思想は常に明確に言語を發表せしむべきなり。算術科は論理正確にして毫厘の誤謬を許さざれば、之を學ぶ間に正義の念を養ひ、その緻密の思考を

要するにより注意を凝集し、勤勉忍耐の風を作るもの故、訓練上の價值亦少なしとなさず。

概要



設問 算術教授の目的を詳説せよ。算術科の訓練上の價值如何を問ふ。

第二節 教授の材料

第一項 材料の選擇

算術教授の材料はもとより數なり、數には整數、小數、分數の三種類あればその唱へ方、書き方を授けざるべからず、而して數を取扱ふ上より計算の種類を生ず、加減乗除の四則これなり。かかる計算をメノコにてなすを諸算と云ひ、數字を藉りて行ふを筆算、算盤を用ふるを珠算とす。さてこれ等の計算の形式を運用するにつき實際に當て箝むるものは、やがて算術問題の内容となすなり。

- 一、數の唱へ方
- ヒトツ
- フタツ
- ミツツ
- ヨツツ
- イツ
- ムツツ
- ナナツ
- ヤツツ
- ココノツ
- トチ
- の

唱へ方を教へて數へしめ、五以下の數の分解、結合、自由なるに至るまで進歩せる時、イチ ニ サン シ
 ゴ ロク シチ ハチ ク ジュー の唱へ方を教へて數へしむ。後には七をナナ、四をヨン、九をキューと呼ぶ變りたる唱へ方をも授くべきなり。

二、數の書き方 數字と漢字と二種あり。數字を先に教へ漢字を後にす、數字の亂雜は不明誤謬を來す原因なれば、最も之が練習に意を注がざるべからず。



三、符號の書き方及び讀方

寄す印 $\begin{matrix} 1+ \\ 2+ \end{matrix} \rightarrow$ 寄す

引く印 \rightarrow 引く
 等しき印 \rightarrow 一 \rightarrow 二 \rightarrow 三
 掛くる印 \times 掛くる
 割る印 \div 割る
 小數點 \cdot 小數點(又俗にコンマとも云ふ)整数の所在位に 0 を置かず。
 四、計算の形式 符號は總べて前方に出して間違をさくべし。

加法

$$\begin{array}{r} 14 \\ + 53 \\ \hline 67 \end{array}$$

減法

$$\begin{array}{r} 431 \\ - 119 \\ \hline 312 \end{array}$$

乘法

$$\begin{array}{r} 134 \\ \times 2 \\ \hline 268 \end{array}$$

除法

$$\begin{array}{r} 25 \overline{) 128} \text{ (5)} \\ \underline{125} \\ 3 \end{array}$$

$$128 \div 25 = 5 \text{ (餘り } 3)$$

五、心算と形式算 心算は算術の形式に依らず。心意の運行に従ふものなれば、之を形式算に比するに心力の陶冶に對して大なる價值あり、特に外界の爲めに亂さ

れざる練習となるものなり、されば形式算は確實を以て勝るも精神を多く働かすは心算を以て勝れりとす。心算は數の小なるもの計算の甚しく複雑ならざるものに適す、之を以て徒らに大數に應用し、複雑なる計算に使用せんとするは、勞多くして效少し、故に、幼年生は主に心算により、漸次形式算を加へ、たとひ形式算を以て複雑なる計算を行ふに至りても、その間に介在せしめ心算に訴ふるを便とするものは、常に心算によらしむべし。心算、形式算の割合は

尋常一二年

心算のみ、(實物、數圖、數字を用ひるを妨げず)

尋常三年

心算三分の一、形式算三分の一、

尋常四年

心算二分の一、形式算二分の一、

尋常五學年以上 心算三分の一、形式算三分の二、

心算は實用上最も利便にして、かつ、迅速を貴ぶ者なれば、その算法の如き計算の方法に隨意にして、なるべく捷路をとらしむべし。

六、珠算 珠算は我國民間に普ねく使用せられ、歴史上の由緒ありと雖も、數の觀念開發に對しては心算に劣るは勿論、形式算に比しても劣るのみならず、形式算に於ては運算の筋道明なれば、誤謬を發見することも容易なれど、珠算にはこの便なし、珠算は常に實物に依頼するより心意の發達を阻害し、抽象的に思考する作用を強むる能はず、唯形式算に比して迅速に計算の結果を表はすことを得るの利あれど、これとて加減の二法

に限れば既に數の觀念を得たるものが、計算の器械として使用する價值あるに過ぎざれば、教育的價值極めて少しと云はざるべからず。されば心算、形式算を用ふるを本體とし、土地の情況によりては珠算を併せ用ふるを得るは教則の規定なり。

七、諸種の算法 數の計算の種類は、基づく所、加減乗除の四則なるべけれど、これが種々に入り込みて歩合算、比例等の算法を生ず、商業地の兒童或は他日家計の整理に當るべき女子には、特に日用簿記の大要を授くるを得るは教則の定むるところなり。

以上は形式の方面より材料を論じたるも、その計算のよつて起る實質方面よりも教授材料を考へざるべか

らず。

八、問題選擇上の注意

- (一) 家庭及び學校に於て兒童の經驗し遭遇する事項たるべし、これ兒童の解釋計算容易なればなり。
- (二) 修身、地理、歴史、理科等に於て理會せられたるものなるを要す。
- (三) 土地の狀況に適切なるべし。
- (四) 經濟上社會上の事實にして、將來の生活に必須なる事項たるべし。
- (五) 一時間中何等の連絡なき各種の事實を計算せしむべからず。

前後に聯絡あり首尾完結せる事項を取扱はしむるは、

實質上の價值多ければなり。

第二項 材料の排列

教授すべき材料は以上に記したるが如くなるが、兒童心意の發達に應じて之を排列せざるべからず。尋常一學年に於ては、二十以下の數の唱へ方、書き方を授け、この範圍内に於て、四則の觀念を明にして、加減の基礎たる二つの基數の寄せ算、及びその逆の計算に習熟せしめ、兼て乗除の基本觀念を養ふ、第二學年にては百以下の數の唱へ方、書き方、計算の符號を授け、乗法の根基たる二つの基數の掛け算、及びその逆の計算に習熟せしむ。第三學年に至りては一萬未満の數の唱へ方、書き方、

加減乗除を授けて一般の計算法に習熟せしめ、第四學年に至りては數の範圍を十分に擴張して四則を練習し、小學の呼び方書き方、簡易なる加減乗除、諸等數の容易なる取扱を授くべく、土地の狀況によりては、珠算の加減を授くべきなり。第五學年に至りて、整數小數の加減乗除、諸等數、簡易なる求積、メートル法を授け、珠算を加ふるときは加減に止む。第六學年に於ては、分數と歩合算との大要を授け、四則應用問題として歸一法を授け、珠算を加ふるときは加減乗除を授くべきなり。高等科第一學年に於ては、程度の高き分數歩合算を授けたる後、比及び正比例、反比例の語とその觀念を授け、進みて正比例、反比例、按分比例等の問題を解かしむ、されど

比例式は未、授けず、第二學年に至りて比例式を授け、その解法を應用して單比例、複比例の問題を解かしめたる後、總復習をなし、第三學年を置くときは前各學年の補習をなさしめ、更に求積を授く。高等科に珠算を加ふるときは、加減乗除を授くる規定なり。

算術の問題を選むに當り、數の關係を主とすべきか、それとも實際生活上の應用を主とすべきかの二主義を生ず。前者を形式陶冶主義といひ、後者を事實計算主義といふ。事實計算主義は實際の生活上より材料を取るといふ。故、兒童をして計算に對する興味を惹起さしめ、他教科にて授けし知識を確實にし、日常生活に必須なる知識を與へて、實際問題を解釋する力を得しむ、數の關係は

事實と離れて表はるるものに非れば、兒童心意の發達に應じ、かつ、實地問題を捕ふれば印象深くして永く記憶に残る利あり、されどその弊や事實計算に従ふ時は事實の解釋に勞力を費すこと多くして練習の機會少く。數の形式的順序、數の關係の難易の正當なる順序を追ひ難ければ、かかる缺點を補ふに形式陶冶主義を用ひざるべからず。要するに教授は事實計算主義により、之を練習するため形式陶冶主義に従ふべきなり。

概要 算術教授の材料は整数、小數、分數等の數の唱へ方、書き方、符號の唱へ方及び書き方、加減乗除の計算法とその混合せる歩合算、比例等の算法、これ等の算法を形式に依らずして行ふ心算、算術の形式に従ふ形式算、算盤をかりて行ふ珠算とあり。而して數の表るる實質は

他教科目に於て授けたる事項、及び土地の情況を斟酌して日常適切のものを選ぶべし。

教材の排列、尋常一學年は二十以下の加減と、乗除の基本觀念、二學年は百以下の加減乗除、共に心算のみ、三學年は一萬未満の形式算の加減乗除、四學年は一般の整数の加減乗除に加ふるに、小數の簡易なる計算をなさしむ。第五學年は整数及び小數、諸等數を授け、第六學年は分數歩合算を授く。高等科第一學年に至りては分數、歩合算、比例の知識を與へ、第二學年には比例一般の教授をなす、第三學年は前各學年の補習と求積を授く、常に既修の事項を確實にする爲め練習するは論なきなり。

算術教授に當り數の關係を正しき順序にて、取扱はしむるを主とする形式陶冶主義と實際生活の計算をなさしむる事實計算主義とあれど、各長短あれば併せ用ふるを宜しとす。

設問 算術教授の材料を説明せよ。問題を選択するに當り、注意す

べき條件を列挙すべし。事實計算主義と形式陶冶主義との長短を論せよ。

第三節 教授の時間

算術科は尋常科高等科共に必修科にして、尋常一學年は一週五時間二、三、四學年は一週六時間、五學年以上高等科は各學年通じて一週四時間の定めなり。土地の状況により珠算を併せ課するときは、尋常科第四學年以上、高等科各學年に於て併せ授くべし。算術は心力を消費する多き課業にして、注意の周密を要すれば、心身の勢力、最も旺盛なる第二時目に課するを宜しとす。

設問 算術教授の時間割を作れ。

第四節 教授の階段

一、豫備 既知の觀念を喚起して、新教材を理會するに適當なる思想界を形成するを云ふ、これには形式の豫備と、内容の豫備とあり。形式の豫備とは掛け算を授くる場合に、同數を幾度か加ふる心算をなさしむるが如し、内容の豫備とは、即、事實上の豫備にして、計算に對する兒童の興味を惹起すものなり。

二、提示 新なる數、算法、規則、理法を理解するに必要な事實例題を提出し、或は心算により、或は筆算を交へて歸納的に一步一步順序正しく説明す。初歩の教授には實物繪畫等を用ひ、分解結合して數の觀念を明瞭ならしむ。

三、比較總括 提示に於て取扱ひし數例題を比較せしめ、又は既習の知識と比較し、その間に存する法則理法を發見せしむ、法則理法の發見は豊富なる材料中より兒童をして自然に發見せしめ、自之を構成して發表せしむるを宜しとす。かくして總括せる法則理法を兒童に筆記せしめんには抽象的の文章として記述せんよりは、具體的の實例を以て記入せしめ、又、稍、變形せるものに遭遇する毎に、その實例を記入せしめ置くを可なりとす。

四、應用 前段に於て歸納せる法則理法によりて、解釋せらるべき例題を出して練習せしむ、これ算術教授中、多くの時間を要するものなり。

左に實地の教授例を示す。

題目 乘法

目的 乗法の形式を教へ、且つ練習せしむるにあり。

但し乗數が一位數にして、各位の積が十未滿なる場合。

方法

一、豫備

一、乗算九九の練習。

二、諸算練習。

(イ) 梯四個入の籠三籠にては幾個なるか。

(ロ) 同三十個入の大籠三籠にては幾個なるか。

(ハ) 一方のかごに百個宛入れり、兩方のかごにては幾個なるか。

(ニ) さらに一方に百三十四個宛入れりとせば、兩方のかごにて

幾個なるか。いかにして算出せしか。

三、今より、かかる大數の乗法を筆算にてなすことを教ふべし。

二、提示

(一) 乘法の方法教授。

(イ) 乘法を行はんに如何に書き並ぶべきか。(被乗数、乗数の書方、線の引方)

(ロ) 教師乗法の形式を板書す。

(ハ) 算法は如何になすべきか。

(ニ) 最初に乘せし答はどこに書くべきものなるか。(乗数の下) 但しそれより後の(最初の答より次第に上位に)

(ホ) この答を讀め。

(二) 算法の理由説明。

(イ) 先づ以上の算法にて誤なきは何故なるか。

(ロ)
$$\begin{array}{r} 134 \\ \times 2 \\ \hline 268 \end{array}$$
なる式にて左の説明をなす。

4 の二倍は幾何……30 の二倍は幾何……100 の二倍は幾何。

以上 8 60 200 の和は幾何なるか。

三、比較

1. 2031×2 上式を筆算にて、計算するには如何になすか。

(イ) これを書き並ぶるには……答をだすには……

(ロ) 答はどこに書くべきか。

(ハ) この答は誤なきと思ふか。(檢算は諸算にて除法を行ふ)

二、下式の計算を行ひ、且つ檢算をなせ。 212×3

その算法を話せ。

四、總括

一、乗法の算法はまづ最初の積を、その乗数の下に書き、それより上位の積は最初の積の上位に次第にかけば可なり。

二、然らば今一度筆算乗法の算法を話せ。

五、應用

一、左の式題の計算をなせ。

(1) 113×2

(3) 2013×3

概要 算術教授は五段の形式的階段に従ふを得べし、豫備は既知の觀念を喚起して新教材を受取るべき素地を作り、新しき算法規則を教へん爲に例題を提示して説明し、次にはその提示したる數例題を比較して規則理法に總括せしめ應用として種々の問題を與ふ。

設問 算術教授の階段を記せ。

(2) 1302×2 (4) 2300×3

第五節 教授上注意すべき事項

一、綿密正確 算術教授は兒童の論理學なれば、極めて綿密精確を主とし、聊も曖昧粗莽なるを許す勿れ。

二、數字の正確 數字の書き方、運算の方式はつとめて正確ならしむべし、數字運算の正しからざるは誤謬の基なり。

三、驗算の習慣 除したるものは乗じ、減じたるものは加へて、必ず驗算するの習慣を養ふべし。

四、概算豫測 問題に對し概略の答數を見當せしむるを要す、これには「アタマ掛け」等の算法を授くるを宜しとす。

五、徐々漸進 算術教授は一步一步と徐々漸進すべし、飛躍する勿れ、既習の事項を常に確實ならしめんに留意せよ。

六、問題の文章 算術科は國語教授にあらねば、問題の文章は極めて平易なるべし、そのいりこみて多數兒童の解説に苦しむものは、その解釋法の手ほどきをなすべし。

七、言語明確 兒童が問題を解説するに用ふる言語は、最も精確なるを貴ぶ、毫も曖昧過誤あることを許すべからず。

八、實物準備 度量衡の實物を準備し、或は目方を記し、長さ廣さを劃せる實物、地面などの用意必要なり。

設問 算術教授を行ふに當り注意すべき條項を問ふ。

第四章 日本歴史科

第一節 教授の目的

歴史は人間社會の沿革を調ふる學問なれば、その教育上の價值は種々の方面より見るを得べし。歴史は過去の出來事、人間の行蹟を示し、古今成敗の蹟、政體變遷の

趣を教へて人の眼界を廣め、偏狹固陋の弊を避くると共に、歴史は繰返すの諺あるが如く、古を温ねて新を知り因果の關係を類推するにより、記憶、想像、推理の作用をも強からしむるが上に、歴史は最後の法庭なりの諺ある如く、人物の是非善悪は歴史の批判を以て定まるものなれば、勸善懲惡の上に吾人行爲の教訓となること頗多し。

歴史はかく知力の陶冶の上に大なる効果あるのみならず、愛國心を養ひ偉人に對する尊敬追慕の念よりわが人格を育成し、或は古人の傑作によりて美感を養ひ、運命の動かすべからざるを覺えて、敬虔の念を温むるが如く、知情意を陶冶する上に於て偉大なる效績あり

とす。
概要

歴史教授
の目的

知力の陶冶

個人、家庭、社會、國家等あらゆる社會
實質的範圍に於ける諸種の知識を具體的
に學ぶこと。

形式的記憶、想像、推理等諸心力の發達。

情意の陶冶
愛國心。
勸善懲惡、偉人模倣。

美感を養ひ、敬虔の念を温む。

設問 歴史教授の目的を述べよ。

第二節 教授の材料

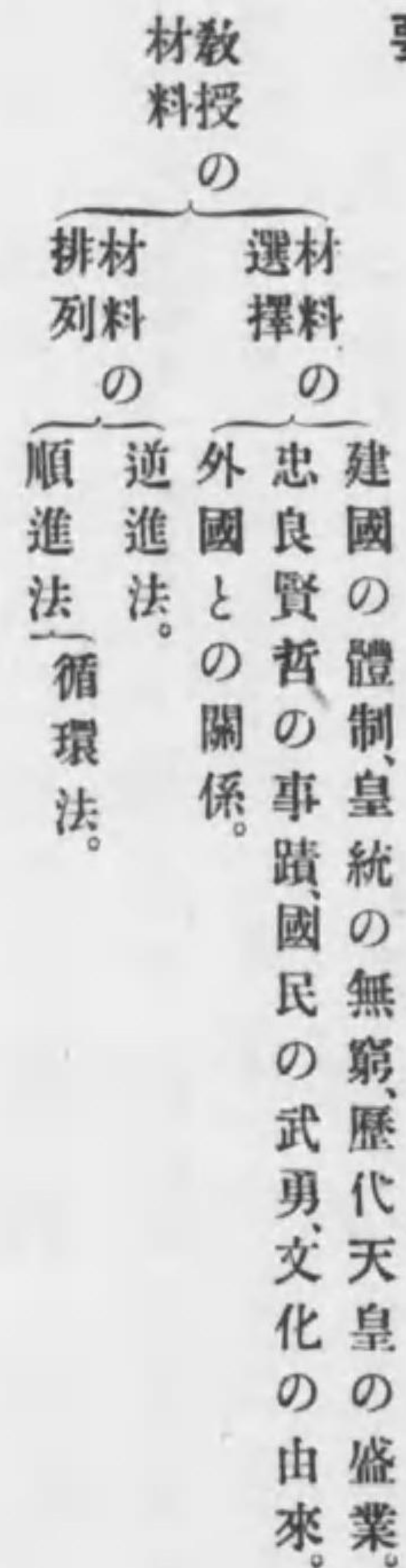
小學校の歴史は日本歴史に限る、即、教則に示すがごとく建國の體制、皇統の無窮、歷代天皇の盛業、忠良賢哲の

事蹟、國民の武勇、文化の由來、外國との關係等の大要を授けて、國體の大要を知らしむるを主とし、兼て國民たるの志望を養はんとするにあり。されどその古に疎にして漸く今に近づくに従ひ、稍、詳密なるべく外國との關係は今後の歴史教授に於て最も意を注ぎて授けざるべからず、今後の國民教育に於ては何れかの機會を求めて外國の歴史の大要を授けざるべからざる時期に到著すべけれど先づ差當り國史を授くるに際し、機會に應じて外國の歴史に附して教ふべきなり。歴史を授くるに際し、今より溯て太古に及ぶ逆進體と、太古より下つて現時に及ぶ順進體とあり、現時のことは兒童の見聞に新しければ兒童に理解し易きが如くなれど

歴史上の事實は因果の關係を以て起るもの、またかかる關係を知らしむるが歴史教授の目的なれば順進法に従ふを可なりとす。同じ順進法に従ふにも年々繰返して太古より現時迄の歴史を授け、級の長ずると共にその内包外延を増加する循環法と、級と共に取扱ふべき時代を異にする直進法とあり。何れも長短あれど要は始の二個年直進し終り、後の二個年に更に一回直進して、つまり一回循環するを以て當を得たりとす。始の二個年は主として歴史上の各時代を代表するに足るべき人物を選びて題目とし、その人物に關係せしめて種々の事變を附説し、若し代表するに足るべき人物を得難き場合には、顯著なる出來事の題目の下に種々

の人物の事蹟を語りて、これ等の題目の間には常に連絡を保たしめ、かくて國初より現代に至る事歴の大意に通せしめ、後の二個年には稍、高尚なる歴史上の知識を得しめんために、著名なる人物、顯著なる事蹟につきて補習すると共に、制度、文物、風俗に關する概括せる説明を加へ、かつ社會の變遷と邦國の盛衰とに關する明晰なる概念を與へんことを期せるは、國定教科書の精神なり。

概要



〔直進法。〕

設問 歴史教材の選擇につきて記せ。歴史教材の排列法を問ふ。

第三節 教授の時間

尋常科四學年までは特別に歴史教授の時間なければ、國語讀本中にある歴史材料につきて、この知識を與へざるべからず。五學年以上に至つて必修正科となり、地理と合せて毎週三時間なれば、隔週二時間を課する事となるべし。而して尋常科五學年六學年に於て一回國初より現時に至る國史の大要を授け、高等科に進みて更に一回稍詳に我國發達の蹟を知らしむべく、特に第三學年に於ては維新以來の事歴を授け、その教授時數

は地理と共に毎週二時間の定なり。

設問 歴史教授の時間につきて記せ。

第四節 教授の階段

一、豫備 兒童既有の歴史上の知識を復現せしめて、新材料を理會する素地を作るもの、之には古人の遺物遺蹟を觀察せしめ、模型、繪畫を示し、紀念日を想起せしめ、詩歌を朗讀し、その人物及び當時を想像せしめ、或は既有の觀念を喚起せしめて知識上、感情上の豫備をなす。

二、提示 豫備に於て想起せられたる知識に結合して新教材を提出す、平易流暢にして抑揚頓挫ある言語。わざとならぬ身振手真似の妙用に歴史地圖、系譜、繪畫、模

型、遺物等を巧に用ひて近く比喩を取り、児童をして身、その境にあるが如く思はしめざるべからず、長き材料は數段に分ち、一段毎に児童に復演せしめて全段の直觀的教授を終るべし。

三、比較 新教材を十分に理解せしめん爲に、その材料間の因果の關係を考へしめ、或は舊材料と新材料と比較せしめ、その事實の動機を搜らせては道德上の批判を加ふるなど、專、事實の真相を覺らしめんとす。

四、總括 長き材料中より要點を抽出して表を作らしめ、材料によりては概念的のものを分離整頓して言語に表はさしむ。

五、應用 事實中に含める道德的教訓を児童自身に反

省實行すべきを促し、或は文章に綴らしむる等種々の方法あり。

歴史教授の材料を五段に取扱ふべき場合は寧、少くして多くは豫備、提示、應用の三段にて事足れり、これ歴史は事實を教ふるを主とするものにして概念、理法を示すものにあらざればなり。

されど、よく新教材間、若しくは新舊教材間の關係を比較せしめて、事實の真相を辨へしむる注意を怠るべからず。

次に實地の教授案例を示す。

後三年の戦 高等一學年

一、豫備

前九年の役とは、どう云ふ戦争でありましたか、
 義家の方は誰が助けましたか、
 清原武則はこの人でありましたか、
 武則は戦争の功でどうなりましたか、
 清原武則は、前九年の役の功によつて鎮守府將軍となりました、
 鎮守府將軍とはどう云ふ職務を行ふのです、どこに居つたのでせうか。

二、提示

清原武則が前九年の役の功により鎮守府將軍となつて、今の陸中全體程の廣い領地を持つて居て、その勢が奥羽になりひびいて居りました。

武則に二人の子があつて武貞と武衡とあります、武貞の子が眞衡であつて、武貞には、猶、亘理經清といふ人の寡婦を娶つて家衡を生みました、猶、亘理經清の寡婦は武衡の所へ嫁ぐ前に清衡といふ子

があつて、それをもつて武貞の所へ來たのです。

亘理經清といふ人はどう云ふ人ですか、聞いたことがありましたか、前九年の役に眞任方の人です、戦死したのです、この人は藤原秀郷の後裔ですから藤原經清とも云ひます、そうすると清衡は亘理氏です、又藤原清衡とも申します。

個様に兄弟が腹違で三人ありますが、その間は、眞の兄弟の様に仲が善かつたろうと思ひますか、眞衡の妻は吉彦秀武の女でござりまして、成衡といふ子供がありました、成衡の妻は源頼義の女でござりました、源頼義といふは、どう云ふ人でありましたか。

さてこの結婚、頼義の女を成衡が娶りました、結婚を喜んで、吉彦秀武が遙々、出羽から、御祝に來たのです、

出羽とはどこを云ふのです、成衡は、どこに居たのでせう、
 吉彦秀武が御祝に來たのを眞衡が粗末に取扱ひました、そこで秀武が非常に立腹して國に返りました、眞衡の仕方はどうだと思ひ

ます、
なせ秀武が立腹したのでせう、その譯を正しく云ふて下さい、
秀武が返つてから段々考へて、どうしても仕返しをしてやらうと
思ひそこで武衡及び家衡、清衡を身方に引入れて、眞衡を攻めに來
ました、武衡及び家衡、清衡たちはどうして秀武に加擔したと思ひ
ます、
そんな戦争をして居る所へ源義家が陸奥守となつて來ました、白
河天皇のときです、義家は誰の子でした、前にどう云ふことをした
人です、陸奥守とは今のどんな役に當りませう、義家が來てどちら
を助くると思ひますか、
義家は眞衡を助けました、それは前九年の役に武則が援兵を出し
たその恩に報いたでありませう、又一方には自分の妹が眞衡の子
に嫁いて居るからでもありませう、戦争が中々手間取れて容易に
片附かない、義家が武衡たちの居る羽後の金澤柵地圖によりて位

置を示すを攻めました、義家の弟の義光が京都から、官職を罷めて
來て助けて攻めたたてたのです、義光の心持はどうですか、義家はど
う感じたでせう、中々城が陥りませんが、その中に清衡は義家の方
につきました、秀武も降参して、今は武衡、家衡、丈になりました、義家
は義光の來てくれた爲めにとうとう武衡、家衡を討ち取りました、
この軍が三年かかったから後三年の役といひます、なせ後の字を
つけました、

(繪畫あらば雁行の亂るるを見て伏兵あるを知りしを語るも可
なり)

義家が朝廷に申し上げて將士を賞與せられんことを願ひました、
朝廷では自分勝手に開いた戦争だ、朝廷の命令によつて、始めた戦
争でないからと云ふて褒美も下りません、なせ朝廷はこれを内輪
の戦争と見なしたと思ひますか、義家は、しかたなく自分の財産を
裂いて將士に分けてくれたと云ふことです、そこで將士達は源氏

の恩は忘れてはならない、朝廷の御仰よりは源氏の命令が大切だと云ひあつた程、義家の恩を深く感じました、

三、比較

この戦争をなせ後三年の戦といひますか、前九年役と、どこが似て居りますか。

この戦争の起りは何でありましたか、真衡が丁寧な人で思ひやりのある人であつたら、どうだらうと思ひますか、

もし義家がこの戦争を構はずにおいたら、どうでありませう、

奥羽が亂れて、少しも朝廷の威令の及ばぬことになりませう、義家は國守ですから、これを構はずに置くことが出来ると思ひますか、

義家はなせ朝廷に申上げずに戦争をしたと思ひますか、

義光が助にこなかつたらどうでせう、なせ朝廷は褒美を下さらなかつたと思ひますか、東國の武士はなせ源氏の方を朝廷より重いと申つたでせう、もし朝廷でこの時に褒美を下さつたならばどう

でせう。

四、總括

書物を讀ましめ原因、戦況、結果につき簡単に表明せしむ。

五、應用

義光はなせ官職をもやめて義家を助けたいと思ひますか。私共は兄弟の危急の場合にはどうしなくてはなりませんか、あなた方も何か、兄さんを助けて上げたことがありますか、

義家はどうして私財を抛つて、將士に分けてやりましたか、

この將士達が働いてくれなかつたら戦争はどうであつたらう、

將士達はなせ朝廷を怨んだでせうか、その怨んだことは皆さんは

あたりまへと思ひますか、

將士達が源氏の恩を忘れなかつたことは、どうでありませう、

朝廷の命に背ても、源氏の命には背くなと云ふことは正しいと思ひますか、

概要

教授の段階

應用	概括	比較	提示	豫備
道徳的教訓につきての反省 文章に綴る。	概念的のものに整頓す。 要點抽出。	新材料間の關係。 新舊知識間の比較。	直觀的方便を以て巧なる講演的教授を行ふ。 數段に區分して一節づつ復演せしめては前進す。	知力上。舊觀念、類似事項を喚起して理會の素地を作る。 感情上。遺物遺跡の觀察、詩歌の朗讀、紀念日の想起。

設問

歴史教授の階段を記せ。

第五節 教授上注意すべき事項

一、地理歲月の觀念 地理歲月は歴史の雙眼なれば、事

概要

變の起れる土地と、その年代とは明瞭なる觀念を得しむべし、これが爲には沿革地圖、寫眞遺物等あらゆる直觀的方便を用ひ、重要年表、現時より逆算したる概略の年數を記憶せしむべきなり。

二、繼承表 御歴代表、將軍、執權等、執政者の繼承表を諳記せしむべし。

三、歴史教授の秘訣は兒童をして、身をその時代に置き、その人物とならしめて温き同情を寄せ、正當なる批判をなさしむるにあり。曲げて愛國心を養はんとし、事實を誇大にして忠良賢哲を賞揚するが如きは、眞の歴史教授にあらず。

教授上注意（その時代に身を移さしめよ。）
すべき事項（重要な事實、年代を記憶せしめよ。）

設問 歴史教授につき注意すべき事項を述べよ。

第五章 地理科

第一節 地理教授の目的

地理教授の目的は、土地と人生との関係を明ならしむるにあり。位置、氣候、山川、河海の状態等、所謂土地に關する研究を自然地理とし、土地の上に棲息する人類の集散、生業、交通等、所謂人生に關するものを人文地理學とす。人文地理學のあらゆる現象は、畢竟自然地理學上の諸勢力の産出する所なれば、地理教授のつとむる所は、

この土地と人生との關係にありとす。

近時、交通機關の發達は、主觀的に地球の面積を縮少し、彼我の關係密接となり、外國の事變も直に我國に影響を及ぼすあるのみならず、人類の生活は漸く世界的となり、彼我共に、その餘れるを以て足らざるを償ひ、經濟上の關係極めて密接なれば、特に世界の國勢を明にし、經濟生業の地理的觀念を與ふること最も必要なり。況や、地理科は自國の形體を明ならしむる所より郷土及び本國に對する同情心を喚起し、以て著實なる愛國心を養ふものなれば、その教育的價值は今後に於て、益、大を加へんとす。

概要

地理教授の目的

知識上。土地と人生との關係
感情上。愛國心の養成。

自然の諸現象に關する知識。
土地上に棲息する人類の集散、生業、交通等に關する知識。

本國及び本國の世界に於ける位地を知り、之を愛す。

設問 地理科の今後の教育に於て、一層重きをなすべき所以を問ふ。
地理教授の目的を記せ。

第二節 教授の材料

教則によれば地理は本邦の地勢、氣候、區劃、都會、產物、交通、並に地球の形狀、運動の大要、韓國及び滿洲地理の大要、各大洲の地勢、氣候、區劃、交通等の概略、本邦との關係

ある重要な諸國の地理の大要、本邦の政治經濟上の状態、並に外國に對する地位等の大要、及び地文の一斑をも授くべきなれば、本邦地理、外國地理、地文學の三あるわけなり。もとより本邦地理、外國地理、地文學と嚴然分ちて教ふべきにあらねども、尋常五、六年に於ては本邦及び韓國、滿洲の自然地理を明にし、都會、產物、交通は自然地理の結果として啓發すべきなり、云はば自然地理を主として、人文地理を客とす。而して輸出入品、貿易港、交通等を授くるに因みて、これに關係を保てる外國の地名位置を覺らしむ、六學年の終りに於て地球の形狀運動の大要等、所謂天文地理を終れる後、地球表面に於ける水陸の分布より、本邦との關係に於て重要な

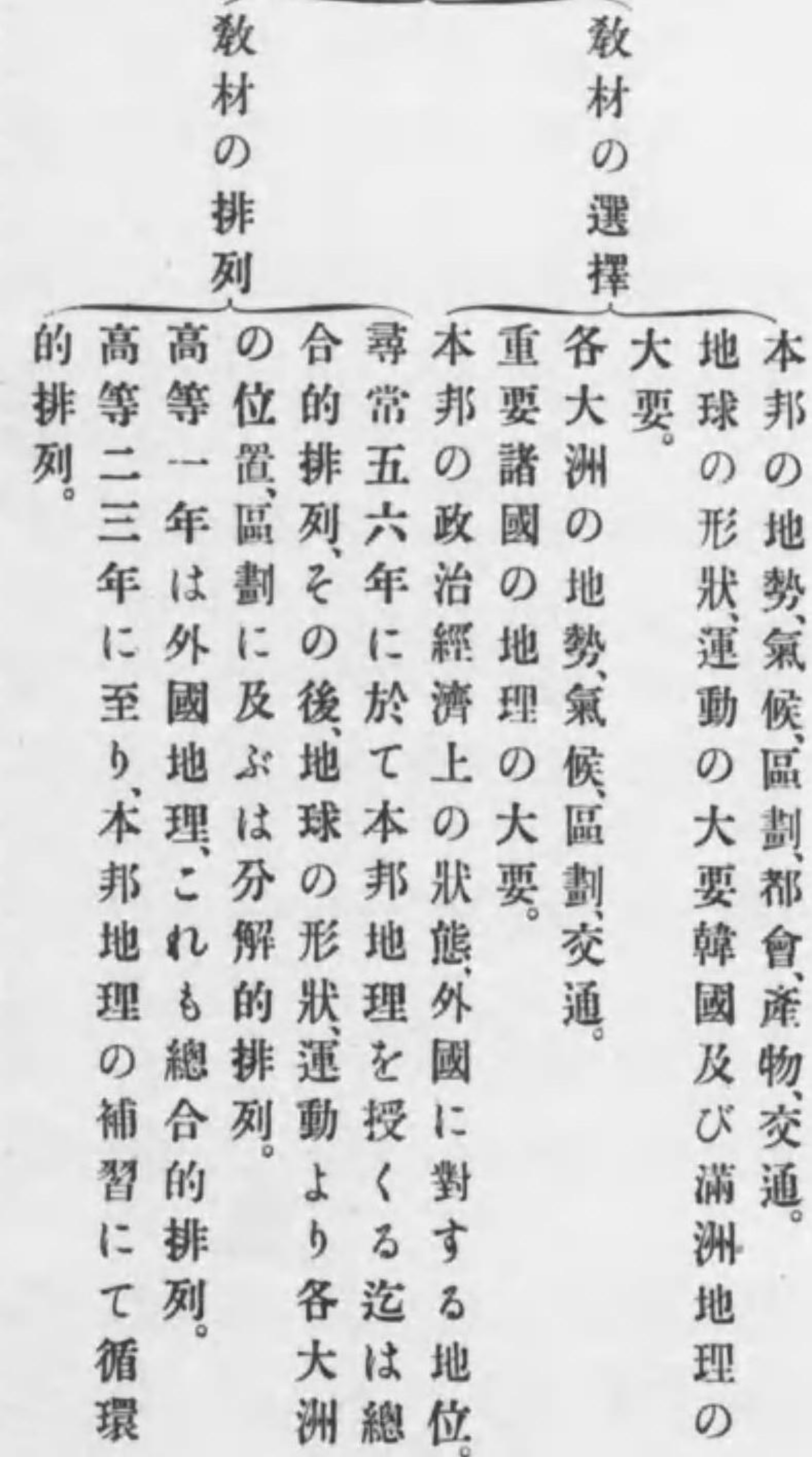
諸國の地理に關する知識を稍、秩序だちて授け先にきれぎれに教へしものを總括すべし。高等科第一學年に於て外國地理の大要を授く、もとより本邦との關係密なる諸國を精密にし、その他は簡略になすべきも、概してアジア洲、大洋洲、アフリカ洲、南アメリカ洲を授くるには、自然地理を主として、人文地理を客とす、即、自然の狀態より出發して、人文諸現象を推究せしむべきなり。歐羅巴洲及び北アメリカ洲は人文地理を主として、自然地理を客とす、語を換へて云はば現時の國勢、經濟、生業の有様より出發し、その原因を尋ねん爲に、その基礎たり條件たるものを自然に於て求めんとするなり。さればその沿革の大要及び現時の國際關係等につき、稍、

詳密なる知識を與ふるを要す。第二、三學年は補習地理を授く、ここには世界に於ける我國の地位を明にせん爲なれば、位置、地勢、氣候は勿論、政治、宗教、教育、軍備等は常に外國と比較し教授すべく、特に生業の地理に於ては生業の種類、その起る理、如何なる生業を我國に於て有利とするや、貿易の起る理、外國貿易の利益等、經濟上の知識を具體的に説明し、特に我國の生業等につきては物産を本位とし、その産地、製法、集散地、需用の方面、販路、價格、將來の見込等につき、まとまれる實地の知識を與ふべきなり。單に産物を羅列し産額を擧ぐるが如きは、この興味と實益との豊富なる學科を無味乾燥ならしめ、徒に兒童の倦厭を招くに止まるなり。要するに將

來の地理科の教材は國勢地理、經濟地理に進まざるべからず。

概要

教授の材料



設問 地理教授の材料を問ふ。 今後の地理教授の材料は如何なる方面に向ふや、地理教材の排列法を記せ。

第三節 教授の時間

尋常科四學年までは特に地理科の設なければ、特別の教授時間あるなし、唯國語讀本中の地理教材を授くるに當り、直觀若しくは直觀的方法を用ひて、その興味を養はんことに務むべきなり。第五學年に至つて始めて必修科となり、日本地理の大要、第六學年に至りて前學年の續き、韓國及び滿洲地理その他外國地理の大要とを授け、高等科一學年は外國地理の大要、第二三學年は地理の補習をなす。その教授時間は歴史と併せて毎週三時間(高等科三學年二時間)なり。歴史も地理も、その目的を異にし教材にも特別の順序あれば、之を併せて授

け得べからず、隔週二時間を課すべきを常例とすれど、地理の教材は歴史に比して多大なれば、便宜歴史の教授時間を割くべきなり。

設問 地理教授の時間を問ふ。

第四節 教授の階段

一、豫備 兒童既有の地理、歴史、理科上の舊知識につき、今授けんとする新教材に關係ある事項を問答を以て復起せしむ。類似の事實を郷土の地理に求め得べき場合には、もとより、この觀念を整頓す。

二、提示 兒童心意の開發に適したる順序により、既知の事項と連絡せしめて漸次提示す。地圖、標本、繪畫の助

により問答對話を用ひ、兒童をして身その境にある思あらしむべし。

三、比較 地勢、氣候、生業皆それぞれの理由あれば、既知の知識と比較してかかる場合には氣候はかくの如く、生業は此の如しと理法を探らしむ。

四、總括 提示したる事項を概括し陸地、山脈、河流等の概念、並に地理上の理法を見出さしむべし。教科書を用ふるときは、ここにて讀ましむ。

五、應用 想像上の旅行をなさしめ、略圖を書かしめ、斷面圖を畫かしむることあり。將來の國勢を想察せしむるなど種々の方法あり。

設問 地理教授を五段の形式的順序にあてはめよ。

尋常五學年地理實地教授案 長野縣

一、豫備

あなた方の著て居る著物は、何で作ったものですか、木綿より外には著物にするものはありませんか、生糸は何から出来ますか、蠶はどこで一ばん多く飼ひますか、長野縣、

なせ長野縣は蠶を飼ふことが一番盛だと思ひますか、一體蠶には何を與へますか、桑はどこに作りますか、ぬれた桑は蠶にわるいです、

これから、この養蠶の一番盛な長野縣の地理をしらべませう。

二、提示

この地圖をごらん下さい、ここに川があります、何といふ川ですか、こちらにも、大きな川があります、川はみんな、こう流れ出すところを見るとこの國はどう云ふ有様の國と思ひますか、

日本中一ばん土地の高い國であります、西の方の國境が一番高い山が屏風の様にならんで居ます、これが日本一の大山脈です、ここに高い山が書いてある、御岳と申します富士山に次での高山、その北に乗鞍岳と云ふ山があります、鞍の様な形をして居るから、こう云ふ名があるのです、

西境の山から出た水は、どちらに流れると思ひますか、東に流れても、東の方に又山があるので、地圖をごらん、こちらの川は木曾川と云ふ、なせこんな名があると思ひます、木曾と云ふことで何か思ひ出したことはありませんか、

木曾川が東に流れやうとすると、東の方に駒ヶ岳といふ山があり、これが又南北に走って居ます、それだから、木曾川は、この御岳の山脈と、駒ヶ岳山脈の谷合ひを流れるのです、〔圖ヲカキナガラ語ル〕、それから北の方をごらん、乗鞍岳の脈つづきから、川が流れ出して段々東に流れますが、又東の方に富士山につづく山脈があるから段

々北に流れて又、戸隠山といふ、高い山があるから東にまがって居ります、地圖をごらん、この川が犀川です、犀川は南の方から来る千曲川に合します、二の大きな川が合はさるものですからこの間を川中島といひます、ここはどんなことがありましたか、千曲川はずっと國の東の隅の國境から流れ出して北に流れます、なせ北に流れ出しますか八ヶ岳といふ高い山のつづきがあります、これが富士山まで続く山脈です、八ヶ岳と東の方は淺間山との合を流れて、そうして犀川に合さります、合さってからは戸隠山や、白根山の合をつたふて新潟縣に流れこみます、淺間山は〔圖ヲ示シ〕
こゝにいふ風に常に煙を吐いて居ります、
これで川が三つすみましたが、もう一つ南の方に流れる川があります、この國の真中に諏訪湖といふ湖があつてそれから流れ出す、駒ヶ岳の脈と赤石山の脈との間を南にながれて居ります、
川の名を一々云ふて下さい、なせそんなに流れますか、山の名を云

ふて下さい、

こんな山ばかりの國ですがどこか平地があると思ひますか、川の兩岸、川の両わき丈が何故に平地となりますか、木曾川の両わきを木曾の谷と申します、材木が出ます、河村瑞賢の話で聞いたことがあります、なせよい材木が出ると思ひますか、寒くて、土地が堅いから木の質が堅く出来るのです、この木は皆木曾川で流します、この川は流が急で寢覺床といふ面白い處があります、犀川の上流の方の支流が多くある所が平地であります、なせ平地ですか、そこを松本平と申します、ここが蠶の本場です、皆さんの御著物もここで飼つた蠶のものだか知れませんが、この平の真中に松本といふ町があります、なせこんな所に町が出来ますか、
諏訪湖のほとりが平地です、諏訪平と申します、ここが一ばん製糸業が盛んです、日本一です、なせだと思ひますか、繭はあり、水が良いからです、

生糸はどこへ出ますか、いくら位の價のものと思ひますか、アメリカへ行つてなになりますか、アメリカと云ふ國はどこにありますか、諏訪湖から出る天龍川の兩側を伊那谷と申します、なせ谷と云ひますか、この兩側でも養蠶製糸が盛です、この人達が色々買物をしたり賣つたりする様な町はどこへ出来ると思ひますか、大概真中所の飯田といふ所です、

千曲川の兩側も蠶か盛です、繭や蠶卵紙が澤山出ます。

この平を川中島と申します、これは細長い平地ですから、上の方の賣買の場所は上田下の方は長野市です、長野市が一ばん繁華な所です、なせですか、なせ善光寺があれば繁昌しますか、

東京から行くには、どの道を行くですか、碓氷峠をこしまして、この國に入ります、これは高い山ですから、アプト式と云ふ特別な鐵道です、それから千曲川の川筋を通つて北の方へ行くのです、この汽

車はどこ迄通じて居ますか、なせここに鐵道をかけたでありませんか、この鐵道の名は何と申しますか、も一筋は山梨縣から諏訪平に出ます、それが木曾の谷を走つて岐阜縣に出で名古屋につづく筈です、これを中央線と申します、まだ全通して居ません、この中央線と信越線と離れて居ては不便ですから、篠の井と鹽尻とでつづいて居ます、松本へ行くには、どうしますか、これを篠の井線と申します、鐵道を一々云ふて下さい、

三、比較

長野縣はなせ養蠶が盛ですか、なせ雨が少なければ都合がよいのですか、

なせ長野縣は雨が少ないのですか、外には原因はありませんか、氣候があまり暑くないのはなせですか、なせ川邊には平地が出来ますか、なせ長野縣には長野、松本、上田、飯田と似た位な町が四方にあると思ひますか、

四、總括

書物を一通り見ませう〔教科書講讀〕

長野縣の地勢、山岳、河流、物産、都會、交通と別々にまとめて云ふて下さい、養蠶は如何なる土地が盛なるかを云ふて下さい、木材はどう云ふ地が良材を出すかを云ふて下さい、

五、應用

長野縣の略圖をお書きなさい、川をそれへ御書き入れなさい、山脈を書き入れ、次に産物を書き入れなさい、鐵道の筋道をも書き入れてごらん。

第五節 教授上注意すべき事項

一、地勢の觀念 地理教授の本領は、土地と人生との關係を明ならしむるにあり。されば土地に關し明瞭なる

觀念を得、兒童をして眼を閉づるも、よく位置、地勢、氣候、山川、河海の状態、ありありと腦中に浮ぶに至らしむべきなり。

二、地圖の知識 地理學の半は地圖なりとの諺ある程なれば、地理の見方讀方を知らしむるは勿論、郷土の直觀を基として、略圖を畫かしめて地圖と實際との連絡をなさしむべきなり。

三、模寫教授 地圖、模型、標本、寫眞等の教具を巧に用ひて、兒童の心中に明なる直觀を得しむべし。常に郷土の直觀を基とすべし、アレキサンダー、フムボルト曰く世界の如何なる地にても地球上のあらゆる現象の模型を有すと、この語、地理教授の眞髓を穿てりと云ふべし。

四、推究 自然地理の模寫教授終らば、問答によりて生業、都會、交通の如何を推究せしむべし。人文地理は一に自然の状態の生む所なれば、その然る所以を考へしむるは興味多く有益なることなり。

五、將來の想察 模寫、推究終らば將來の如何を想察せしめよ、人文地理に於て特にこの段を必要とす、模寫、推究、想察これ地理教授に於て逸すべからざる階段なり。

概要 地理教授は直觀を基礎とし、直觀的方法を用ひて、土地自然の状態を模寫せしむるを第一とし、次にその土地と人文との關係につきて推究せしめ、終に將來の如何を考察せしむべきなり。

設問 地理教授につき注意すべき事項を擧げよ。

第六章 理科

第一節 理科教授の目的

理科教授の目的は、知情意の三面より論ずるを得べし、自然物及び理化學的現象に對する知識を興へ、かつこれらのももの相互に關係せる有様を知り、人生の上にななる影響を及ぼせるを理會せしめて、農工業、水産、林業、鑛業、家事衛生等に向て、必要なる基礎的知識を供給して、現時の開化を理會せしむるは知力の實質的陶冶に屬し、自然物及び自然現象を觀察するより觀察力を鋭敏にし、比較辨別、推理作用を練磨し、眞理を信する心を生じ、専心、事に從ふ習慣を養ふ、その情方面に於ては宇宙の廣大美妙にして秩序整然たるを悟り、審美の感

を發し自然を愛する情を促し、意の方面に於ては動植物金石の標本を採集し、花卉を栽培し、理化の實驗を模倣しその應用に基ける機械機具を製作するところより、強き意志と努力とを以て之を實行すれば、意志陶冶にも頗、效あり。

概要

理科教授の目的

知 實質的陶冶 現時の開化を理解し、諸種の實業に基礎たる知識を與ふ。

情 形式的陶冶。觀察力、推理力、養成。

意。標本採集、機具の模造より努力勤勉の習慣。

設問 理科教授の目的を詳説せよ。

第二節 教授の材料

理科の教材は動植礦物、人體生理、理化學現象に涉りて範圍、頗、廣きものなるが、材料選擇の上に注意すべき條件を擧ぐれば、

一、兒童心意の發達階段に適當すべし。始は動植礦物の材料を主として授け、次に理化學的現象を主として人類の開化を説き、最後に人體生理を説きて人間の自然物に對する位置を明ならしむべし。これ兒童心意の近きより遠きに及ぶ自然の順序に従へばなり。

二、材料はなるべく之を郷土に求め、直觀に訴へて之を觀察し、實驗せしむべし、これ、その形體を實地に就きて自然物そのままを觀察し、その發達の有様をも知る便

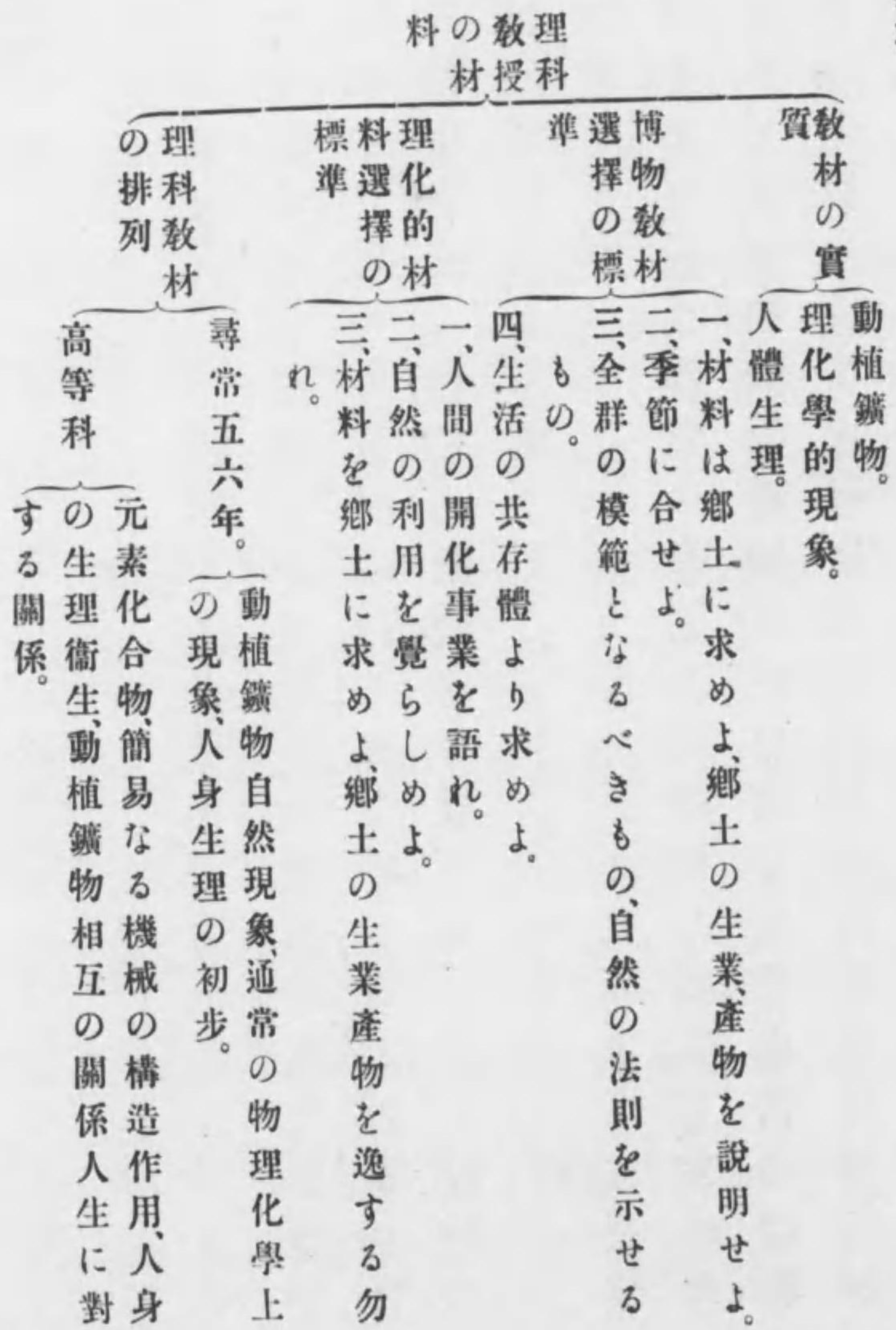
利あればなり。

三、材料は季節に合すべし、これ兒童の直観に訴へんことを欲すればなり。

四、動植物の材料は全群の模範となるべきもの、最もよく自然の法則を示せるものを選むべし。かつ最初は手近き動植物より始めて、次第に生活の共存體を取て、生態學的に説明すべし。

五、理化學の材料は人間の開化事業を中心とし、人生實際の必要なるものにつき、自然の利用に重きを置くべし。されば土地特有の産物或は生活等實地生活に影響すること多く、かつ實用的のものは、つとめて之を洩さざるを要す。

概要



設問 理科教材選擇の標準を問ふ。理科教材排列の方法を問ふ。

第三節 教授の時間

理科は尋常科第四學年までは、その教授時間なく、唯國語讀本中に理科の教材の挿入せらるるあるのみ、されど尋常小學校に於て、國語讀本を授くるに當り、理科的教材に逢はば、よく國語として教ふる外、理科としての教授を全うすべきなり。第五學年以上に至りては、必修科目となり、教授時間は毎週二時間にして、第五、六學年にありては、植物、動物、礦物及び自然の現象、通常の物理、化學上の現象及び人身生理の初歩を授け、高等科に於ては元素及び化合物、簡易なる器械の構造作用、人身の

生理衛生の概要並に植物、動物、礦物の相互及び人生に對する關係を知らしむるを以て、法令の規定とす、されば理科は兒童の注意勤勉を要すること特に大なる學科なり。故に未だ心身の疲勞せざる時に於て課するを宜しとす。

設問 理科教授の時間並に教材配當に關する法令上の規定を述べし。

第四節 教授の階段

理科教授はよく五段の形式的階段にあてはむるを得べし。

博物教授の順序

一、豫備 なるべく郊外の直観をなさしめ、生徒の觀察經驗を復述せしむ。

二、提示 實物、模型、圖畫、黑板上の略畫等を用ひて構造性質並に構造と營養、生活との關係、人生に對する利害の點、並にその利用法を明にす。

三、比較 同種の特徴を見出さんが爲に、形異なるも同じ働きをなす機關を比較す。又各種の機關に等しき影響を與へたる外界の勢力を比較し、又一群中に於ける生活現象の類似せるものを比較す。

四、總括 その特徴を明にして、一の略表を作らしめ、或は特徴を明瞭ならしめんために圖畫を畫かしめ、説明の大意を手帳に記入せしむ。

五、應用 これと類似の自然物を搜がさせ、この流儀にて他の自然物を記載せしめ、或は見出せる理法を他の自然物又は他の生活の共存體に適用せしむ。

次に實地の教授案例を示す。

動物の保護色及び擬態 尋常六學年

一、豫備

今日はこれから、向の原に行つて、色々の蟲を採集して、その形や、色を調べませう、手帳を持って、居つてどんな所にどんな色の蟲が居つたか、之れを書き付けて來るのです、又、皆さんにすぐは見つからなくて、よく見て、やつと見つかつた様な蟲があつたら、その様子を書いて來るです、それを次の時に一々しらべませう、

二、提示

向の原で調べて來たことについて御話しなさい、

青い、ばったはどこに居りましたか、褐色のは……

ここに掛圖がありますが、これは、このはむしです、木の葉の様の形をして居ます、こういうふ様なものを見たことがありますか、竹の節むしは、細い竹の枝を出したやう、しゃくとりむしは桑の枝のやう、

なせこんな色をして居ると思ひますか、もしその居場所のものと色が大違であつたらどうでせうか、

三、比較

皆さんは山に散歩して、雀や、雉子が足元から飛立つのを見て驚いたことはいないですか、

なせ前に気がつかなくつたのでせう、

ひきがへるは何の色に似て居りますか、

寒い國では冬になると兎は白くなり、夏になると褐色になります、なせですか、

四、總括

こう云ふ風に動物がその居る場所の色に自分の色を似せるを保護色といひます、なせ保護色といひますか、その色で他の動物の目につかぬ様に身を守るからです、

又居場所のものと同じ形をして居るのを擬態といひます、しゃくとり蟲が桑の枝に似せるは擬態です、擬態は何の爲ですか、保護色とどこが違へます、

五、應用

保護色の例を、今挙げた外に云ふてごらん、擬態はどうです、

軍の時、軍人の服装はカーキ色といふ、茶褐色に改めたのはなせでせう、軍艦を水色に塗るのはなせですか、

かくて人類の仕事の多くは動物のなせる様をまねたるに考へ及

ばしめ、はさみはかにはさみ、かぶとは、かぶと、かぶと、くまでは熊の手その他多くの類をあげしめ、自然を愛し、動物虐待の戒むべきをさとらしむべし。

理化教授の順序

- 一、豫備 生徒既有の觀念の分解を行ふ、如何なる條件が原因となりてその現象を來ししか、もし條件を變ずれば、現象は如何に變ずるか既知の状態に於ては如何なる現象起るかを問答す。
- 二、提示 豫備にて分解したる條件を、實驗を以て説明すべし、問答を以てその實驗の成行きを明にす。
- 三、比較 前の教授、實驗又は實驗上の生活より同様の場合をあげしめ、或は想像せしめ之を教授したりしも

のと比較す。

四、總括 比較して得たる結果を總括す、かくて總括したる理法或は機械の構造作用、人生に對する關係等を手帳に記さしむべし。

五、應用 類似の現象を説明せしめ、他の現象を見て類異を検せしめ、もし條件變せば現象如何に變ずるかを假定せしめ、之を實驗を以て證せしむ、又實地の生活に適用せしむべきなり。

次に實地の教授案例を示す。

理科 高等一學年 空氣の壓力

一、豫備

石を手へのせれば、なせ重いですか、羽織をぬぐとなせ軽いですか

世の中には目方のないものがあると思ひますか、
 空氣はどうですか、空氣の目方はどうして知れますか、
 もし空氣に目方があるとすると、それ丈の目方で私共が壓され
 て居る筈ではありませんか、どれ程の力で壓されて居ませうか、ど
 うしたら知れると思ひますか、一つ實驗をして見ませう、

二、提示

長さ三尺程の硝子盲管を取り、之に水銀を注入して、さて之を水銀
 を盛れる皿上に倒にして、指を以て、その口を塞ぎ、
 なせ水銀は出ませんか、この指を離したら、どうなると思ひます、
 指を離し、稍、水銀柱降下して、ある點に至り止まるを見て、
 どうなりましたか、なせ水銀は皆下ってしまはないですか、
 水銀が皆下ったら皿の水銀はどうなりますか、皿の水銀が増さな
 い様にするにはどうしたらよいですか、皿の水銀面に板をつけて
 壓して居ったらどうですか、今そんなことをせずとも水銀の下り

て來ぬのはなせだと思ひますか、もしこの管の先に穴をあけたら
 どうなると思ひます、
 水銀の下って來ないのは、この皿の水銀面を何が壓して居るですか、
 板もないのに何が壓して居るのですか、空氣が壓すから、これ丈、水銀
 をおし上げたのです、
 なせ先に穴をあければ下りると思ひますか、
 誰かが空氣を推すのですか、空氣に目方がないならどうですか、
 その空氣の目方丈、この水銀面を推す譯ですが、それはどの位だと思
 ひますか、
 この水銀がなせ、これ丈下りましたか、もっと空氣が重かったらど
 うなりますか、
 軽くなったらどうなりますか、この水銀柱の高さ丈、空氣が壓して居
 る譯です、
 この高さは通例七百六十ミリメートル程です、ザット貳尺五寸で

す、計って見ませう、この管がこれより太かったらどうですか、細か
つたら、どうですか、この管の上に穴をあければ、水銀が下りる所を
見ると、空氣の壓力は、ちやうど、この管の切口の面積丈の上に、この
水銀柱の目方だけで壓すわけです、
それではこの机の上はどれ丈の水銀が推すと同じですか、私の頭
の上は………

三、比較

麥稈で水を吸上げるとなせ水が上って來ますか、

水鐵砲の柄をひくとなせ水が上って來ますか、

目薬をさす道具はどうして作りますか、

吸上ぼんぶは井の水面から二三十尺も上りますが、なせだと思ひ
ます、

四、總括

空氣の壓力はそれではどの位ですか、水銀柱七百六十ミリメートル、

空氣の壓力のことを氣壓と申します、七百六十ミリメートルが一
氣壓です、

五、應用

雨のふる前や、風の吹く前には、この水銀柱が下がります、なせですか、
それでこの水銀柱の昇降によって天氣の豫測が出来るから晴雨
計を作ります、また高山に上れば、水銀柱はどうなりますか、低地で
はどうなりますか、

それで、水銀の高さで山の高さがはかれます、

設問 博物教授の階段を記せ。理化教授の順序を述べよ。

第五節 教授上注意すべき事項

一、迷信打破 理科教授は迷信打破に最も適當せる教
科なり、さればかかる疑念に對しては合理の説明をな

して迷をはらすべきなり。

二、實驗は自然の模擬 理科教授をなすに際して、施すべき實驗は自然に存在する現象を、わかり易く示さん爲に行ふものなることを忘るること勿れ。理科の教授には必ず實驗あるべきものと、見せ物の如き感あらしむべからず。

三、心意開發の順序 兒童心意の開發の順序より入りて、科學の順序より進むべからず。製法、性質、效用の順序に進むが如きは、兒童に授くる所以にあらず、先づ效用につき兒童の經驗界より答辯を求め、さてその效用を生ずる所以を求めて、性質を檢查し、かかる性質のものを作るべき製法を尋ね、さてその原料たるべきものの

産地に及ぶは化學教授の順序なり。

四、啓發的發問 理化の教授は事實より出發し、歸納して法則を得べきものなれば、常に啓發的發問を以て兒童をして自、發明發見せしむべきなり。

五、觀察力養成 博物教科は觀察力の養成を以て主眼となし、その生活の共存體が相寄り、又は相助けて生活する様を理解せしめ、而して宇宙の調和美妙を悟らしむべし。

六、利用厚生之道 理科教授は物質的文明を知らしむる教科なれば、よく利用厚生に關する應用の道につきては、注意を忽にすることなかるべし。

設問

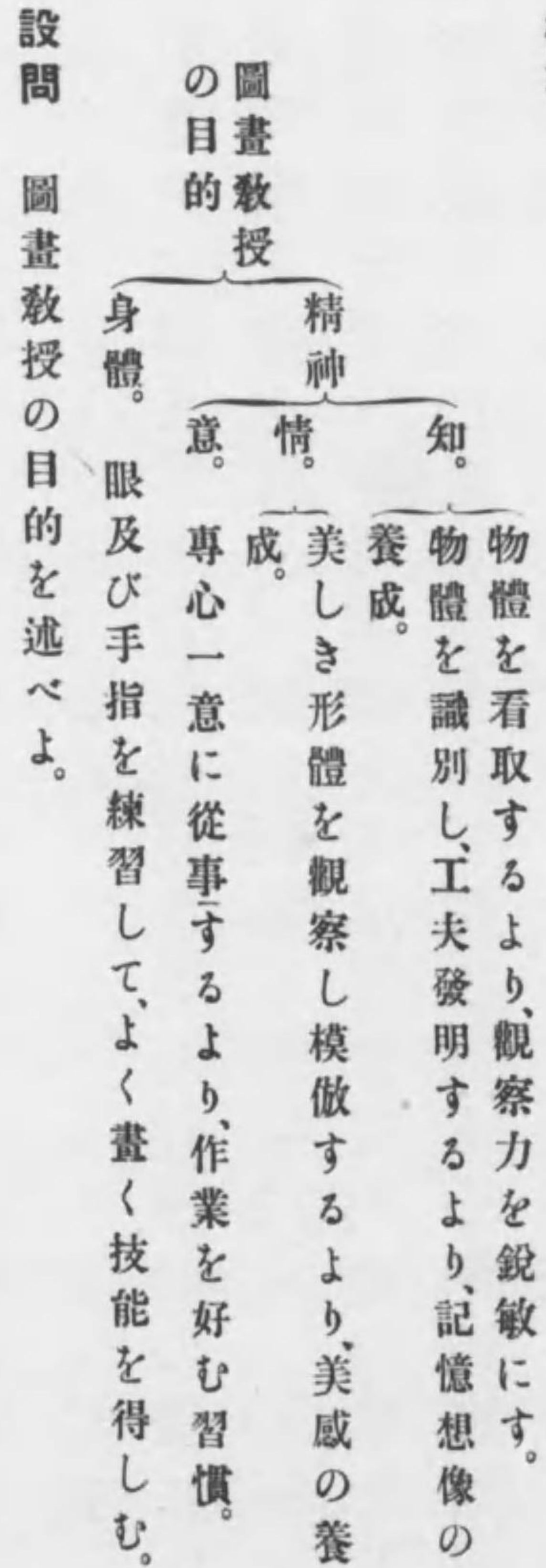
理科教授上注意すべき事項を述べよ。

第七章 圖畫科

第一節 圖畫教授の目的

圖畫は現に看取れる物體、又は既に觀察せる物體、自己の想像によつて構成せる物體を、正くかつ巧に畫く技能を得しむるものなれば、その教育的價值少からず。形體を看取らしむるより、眼及び手指を練習して觀察力を鋭敏にし、記憶力並に工夫構想の念を強うし、美感を養ふて趣味を高尙ならしめ、作業を好む習慣、清潔を喜び綿密を尊ぶ習慣を養ふなど、知情意の陶冶に效多きのみならず、巧に畫を書き得るは、實用上の效果頗、大なりとす。

概要



第二節 教授の材料

小學校に用ふる圖畫を大別して、自在畫と用器畫との二とす、自在畫は器械の方便を藉らず、手腕の運動によりて描寫するものを云ひ、用器畫は器械の方便に依て

寫す畫法を云ふ。
 自在畫は臨本につきて描寫する臨畫と、直接に實物又は模型より描く寫生畫と、手本も實物もなく、自己の思想を發表する思想畫との三あり。思想畫は更に之を細分し得べし、教師より特別の畫題を與へずして、各自の有せる思想感情を思ひ思ひに畫かしむる隨意畫、嘗て觀察したりしものを想ひ起して畫かしむる記憶畫、教師の談話に依て畫く書取畫、寫生畫を迅速に略畫にかく看取畫、兒童既知の思想材料を分解結合して一種の新案を畫き出すを考案畫と云ふ。而して用器畫には幾何畫法、投影畫法、透視畫法の三種あれど小學校にては土地の情況によりて課するとするも、幾何畫法に止め、

投影畫法は理論上の説明を省き、簡單なる實物につきて、その應用を示すに止むべく、透視畫法は毛筆畫又は鉛筆畫教授の際、早く簡單なる説明をなして、その應用を知らしむる外、畫法としては授くべきにあらず。今その配當の割合を文部省圖畫取調委員の報告によりて轉載せん。

畫法	尋常小學校				高等小學校			
	一學年	二學年	三學年	四學年	一學年	二學年	三學年	四學年
隨意畫	五〇	—	—	—	—	—	—	—
臨畫	三〇	五〇	三〇	二五	二〇	二〇	一〇	—
寫生畫	—	—	二五	三〇	二五	二五	二五	二五
看取畫	—	—	—	—	一〇	一〇	一〇	一〇
書取畫	—	二〇	一五	—	—	—	—	—

記憶畫	—	—	—	—	—	—	—	—	—
幾何畫	—	—	—	—	—	—	—	—	—
考案畫	—	—	—	一五	一五	一五	一五	二〇	二五
手工	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇

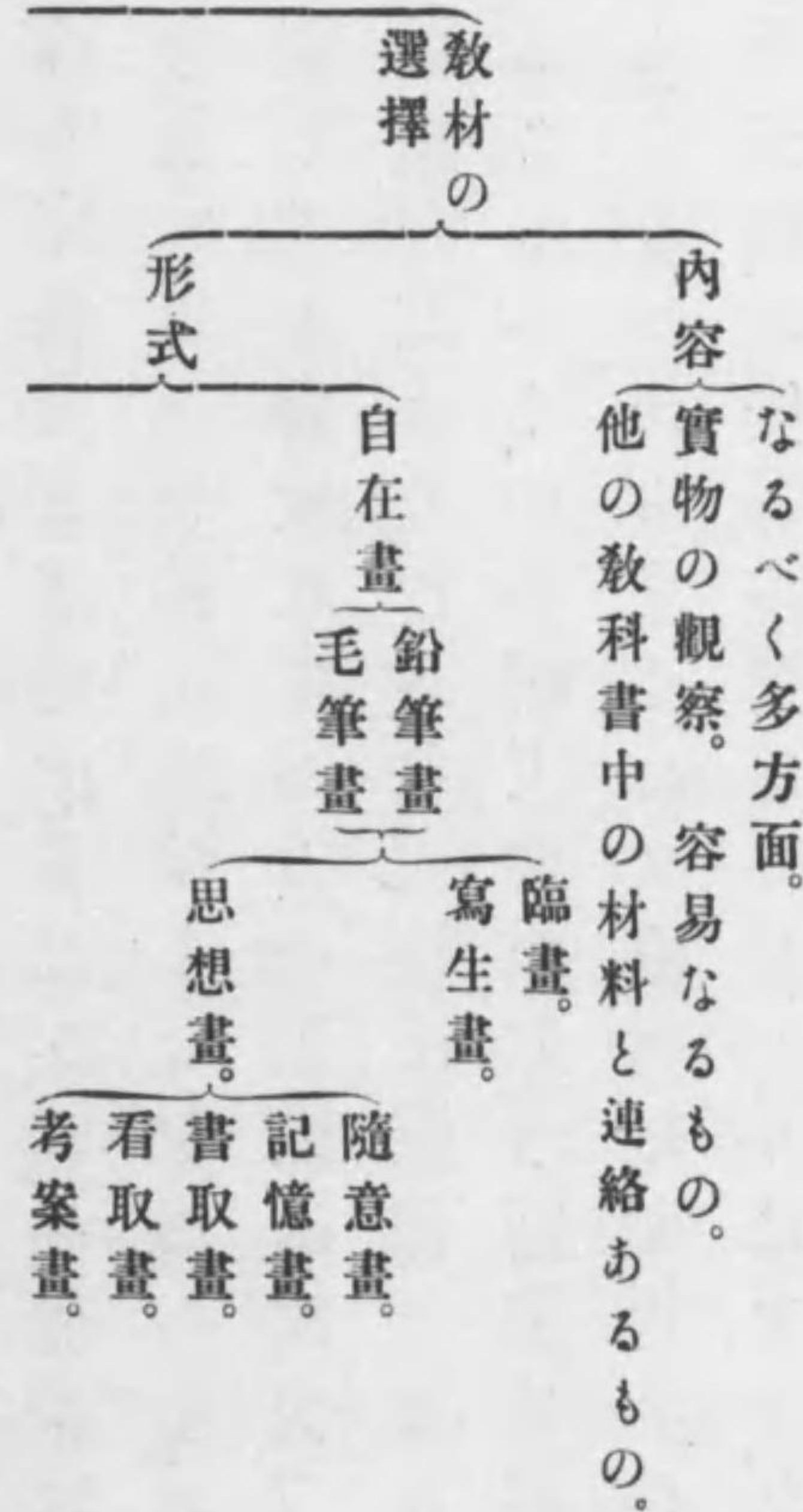
本表は一學年の教授時數を百二十時と見做して調製したるものなり、尋常一學年にも課するものとして定む。

鉛筆畫と毛筆畫との利害は、多く議論の存する處なれど、要するに優劣なしと云はざるべからず。毛筆畫は古く我國に發達し來りしものなれば、歴史的の由緒淺からず、その傑作亦少からざれど、鉛筆畫は近來の輸入物にしてこれが傑作に接する機會少き不利あり。眼の練習は鉛筆畫或は毛筆畫に勝らんも、手腕の運用に至りては、毛筆畫の方はるかに困難なり。鉛筆畫は精細緻密

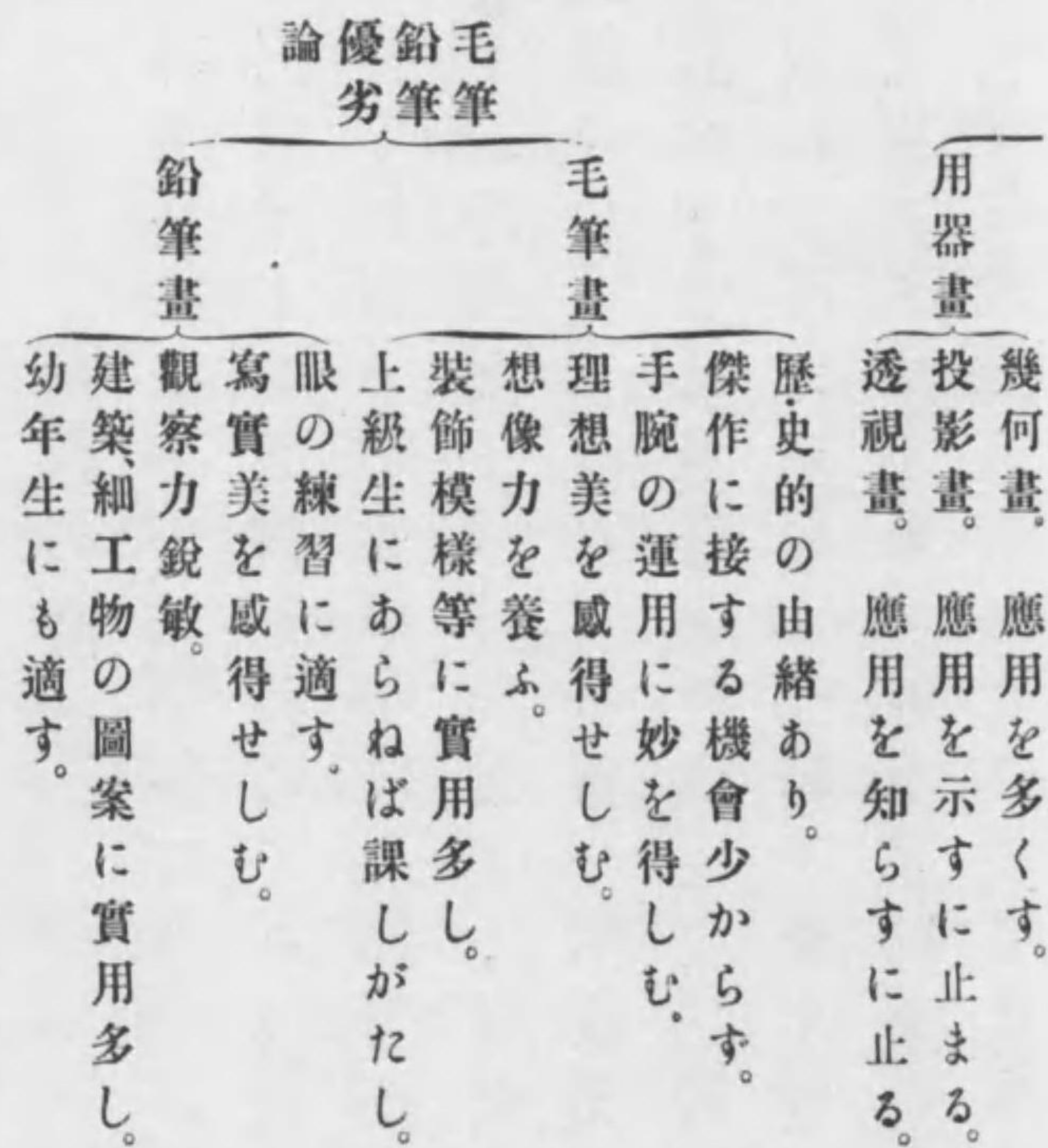
を以て勝り寫實美を感得せしむべく、毛筆畫は氣韻雅致に於て優れて理想美を味はしむを得べし。されば鉛筆畫は觀察力を鋭敏にすべく、毛筆畫は想像力を養ひ得べし。實用の點より考へなば模様裝飾の如きは、概ね毛筆畫によるべく、建築細工物の如き圖案は多く鉛筆畫によらざるべからず。これ又優劣なし、用具の使用の繁簡より云はば、鉛筆の簡なるに如くはなく、幼年生の如きはこれによる外なかるべし。教授法の難易は又伯仲せり、かくの如く兩者優劣なけれど鉛筆畫は幼年生に適し、多少手指の熟練を経たる後、毛筆畫を課すべし、而して上級に至るも常に鉛筆畫を廢せず、毛筆畫の下繪を書くに利用すべきなり。

兒童に畫かしむべき材料はなるべく多方面に亙り、兒童をして容易く實物の觀察をなさしめ得るものの中より採るべく、而してその排列は技術上の難易によりて定むべきなれど、著しき差支なき限りは成るべく他の教科書中の材料と連絡あらしむべきなり。

概要



教材の料



教材の排列。文部省圖畫取調委員報告。

設問

圖畫教材の選擇に關して述べよ。鉛筆畫と毛筆畫との優劣

如何を問ふ。

第三節 教授の時間

圖畫科は尋常小學校第一、二學年に於ては課せざるを得れど、第三學年より必修正科にて。その教授時間は三、四學年に於て毎週一時、五學年以上高等小學校に於ては、毎週男子二時間女子一時間とす。これ女子にはその時間を裁縫に用ふる故なり。尋常小學校第一、二學年に於て之を課すときは毎週一時の定とす。教授の程度は尋常小學校に於ては、單形より始め、漸く簡單なる形體に及ぼし、實物若くは手本に就き、又時々自己の工夫を以て畫かしむべく、高等小學校に於ては、漸くその程度

を進めて、諸般の形體を畫かしめ、土地の情況によりては簡易なる幾何畫を授くることを得るは、法令上の規定なり。

設問 圖畫教授時間の配當表を作れ。

第四節 教授の階段

一、準備 姿勢整頓、用具整頓

既知の筆法にして、新畫に必要なものの復習など、適宜之を行ふ。

二、示範説明 臨畫の骨格、輪廓、位置、運筆の順序など、説明を加へて模範を示す。寫生畫には寫生を施すに注意すべき點を指示し、思想畫には思想を運らすべき條件要領につき説明す。

三、實習 兒童をして筆を取て描かしむ。
 四、批評 位置、形狀、遠近、筆遣ひ、色彩等の諸點により批評す、されど一時に總べての條件につきて批評すべからず、一點づつ批評して之を正さしめ、やがて全體に及ぶべし。

五、應用 今畫きし繪畫に關係ある新なるものを畫かしむ。

左に實地の教授案例を示す。

尋常科第四學年圖畫科教授案

教材

第五圖八角時計

目的

八角時計の形體を正確に看取らしめて、正しく畫くことを得しめ、兼て美感を養ふ、

教具

八角時計の實物

準備

兒童用具の整頓

教法

寫生的臨畫

一、豫備

- 1、皆さんは時計を知つてゐませう、
- 2、あの時計のうちには、此の位ばかりの大きさで柱にかけるので、下にふるのがついてゐないのがありますね、
- 3、これです、(實物提出)
- 4、目的指示 今日これをかいて見ようと思ふがかき得ませう

二、教授及び練習

1、實物觀察、

ね、併し畫くには其の形をよくしらねばなりません、

イ、何角にできてゐますか、

ロ、ここはなにで作つてありますか、

ハ、この蓋は圓い形をしてゐますね、

ニ、なにでつくつてありますか、

ホ、外のところはなせ八角形で、中のはうは圓いでせうか、

ヘ、針はどこにつけてあつて何本ありますか、

ト、何でつくつてありますか、

2、畫法の要領吟味、

イ、いちばんはじめにそとの八角形をかいて、其の次にはどこをかきますか、

ロ、其の次にはどこを………次には………をはりには、

ハ、以上の總合、

ニ、この八角形のところはどこもいちやうな長さですか、まんなかからふちまでの長(幅)はふちの何倍かね、

ホ、字の長さはふちの長さのどのくらゐですか、其のはなれかたはいちやうですか、(ニ、ホ板畫す)

ヘ、針は同じ長さですか、

ト、さあこの時計を手本には、どんなにかいてあらうか、(開本)

3、實物と臨本との對照、

イ、ここのところは手本にはどんな形にかいてありますか、

ロ、この輪は、此の字は、此の針は、掛けるところは……

ハ、紙のどの邊にかいてありますか、(板畫)

ニ、時計の形をかくにはせひ、なくてはならぬものがありますが、どことどこでせうか、外の方からいつてごらん、

4、畫法の示範説明及び描寫、